Doc. 3049 Evid.

Folder 3

(168)

Banned book
now Depository
By 1156

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 3049 26 June 1947

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Booklet, "Great Principles of the Development of Asia" (KOA NO TAIGI), by TOKUTOMI, Iichiro

Date: 15 March 1943 Original (x) Copy ( ) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (x)
Has it been photostated? Yes ( ) No (x)

LOCATION OF ORIGINAL

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: AIZU Public Library

PERSONS IMPLICATED: TOKUTOMI, Iichiro

CRIMES OR PHASE TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE: Greater East Asia Co-Prosperity Sphere; "Mission of Japan" Theory

SUMMARY OF RELEVANT POINTS

Book consists of series of lectures given by TOKUTOMI and gathered by secretary for publication according to preface. Summary of each and pertinent quotations follow:

Promulgation of the Great Imperial Rescript (pp 1-14)
The writer thinks that the Imperial Rescript shows the people how justifiably Japan is fighting. He praises the Japanese Army and Navy for their splended achievements recently demonstrated in the engagements and attacks America and Britain on their world policy.

The Great East Asian War (pp 15-26)
The writer argues the inevitability of the 1905 Japanese-Russian War and the Great East Asian War as the natural sequence of the former, holding Japan's "mission" is to move both North and South....."The Russo-Japanese War is the first step taken by our northward expedition program, and the Great East Asian War is a mere prelude of our southward advance.

WH Wagner

Some of our ancestors came from the north and others from the south. Our old fathers belonged to partly to the Continent race and partly to the seafaring tribes. Whether you take the northward march or the southward advance, they are all the same, for our ancestors graves are located in those zones, to which we are now making way. No doubt the destiny of our race is closely connected with the two zones."

Bell Notes Telling the Approach of the Dawn of Asia (pp 29-43)

In this section the writer emphasizes his belief that the East Asian War is a war for justice and that Japan has a right to survive. The writer denounces American selfishness demanding of Japan the withdrawal from China of its forces, the cancellation of Manchukuo and withdrawal from the Tripartite Alliance.

Causes for the Great East Asian War and Our Decision (pp 47-74)

In this part the writer urges that the opportunity has come to strike down America and Britain, and that the Japanese must not follow their examples in their exploitation of Asiatics. "We must not take after the ways of the British and the American whom we have driven away from Asia. For, they called the Far East their colony, but far from it, in reality, they treated the Far East as a pasture. They regarded the 100,000,000 Asiatics as cattle." (p 85)

"When Japanese commit crimes like the Europeans, we shall be punished by providence." (p 90)

Brief Warnings to the People in Wartime (A.N. Omitted)

The Light of East Asia (A.N. Omitted)

Supplement (pp 190-312)

In this part, the writer says that the Japanese should reject British intimidations and that loyalty to the Throne should be encouraged.

He attacks Britain very severely, taking up a few historic events.

"The Japanese admire Germany and Italy, but whom has Mussolini taken after? Whom has Hitler imitated? They all followed the examples set by Japan." (p 251)

No. 23

興亜の大義

藤峯德富猪一郎著

帝國圖書館
25873
9・八
222

3049

Proj. No. 318
S. A. No.
Sack No.
Item No. 13

版權所有 明治書院

興亜の大義

興亜
大義
12

興亜の大義

無落了
20. 3. 25.
藤峯德富猪一郎
會津圖書館
20. 3. 25
貢入

會津圖書館
9・八
25873
222
昭和 20. 3. 26

會津藩校日新館
會津藩校
會津藩
會津藩校
會津藩校
會津藩校
圖書消却之印

序

時務を識るは難し。況んやこれを論究詳斷して一世の人心を指導するに於いてをや。

× × ×

凡そ事は大小輕重に拘らず、時間的には前代、現代、及び未來を一貫し、これを空間的に見れば恰も一石を池中に投ずる如く、其の波紋は世界の全面に擴がらねば止まぬ。

× × ×

IMT 548

北支事件が其の近き例である。原因は昭和十二年七月七日蘆溝橋の一發にありとし、我が當局者はこれを現地解決を以つて處理の方針とした。然るにそれがやがては支那事變となり、遂に大東亞戰爭となり、而して今や樞軸對聯合諸國の世界大戰となつてゐる。一事を以つて萬事を察す可しである。

× × ×

本書は予が六月中旬より五十日間、病苦呻吟の際、東香祕書が予の近講及び評論に由りて選擇、摘錄したるもの。予は不幸にして之を精細に校閲する能はざる

も、東香祕書が能く予の意の在る所を諒として、其の任務を竭したることは、予が特に玆に言明する迄も無からん。

× × ×

予は病骨漸く癒え、天高く氣清きの候、更に病中の腹稿を刊行して、江湖の誨を乞はんと欲するものがある。豫期にして誤る無くんば、本年の末には其の目的に達することが出來ようと思ふ。豫め記して愛讀者各位に諗ぐ。

昭和十七年八月四日

病床より起ちて方さに
芙蓉峰下に赴かんとする前日
大森山王草堂に於いて

蘇峰八十叟

IMT 542

目次

大詔渙發

大詔を捧讀して ……（三）

大東亞戰爭と日露戰爭 ……（二五）

興亞の曉鐘 ……（二九）

◇大東亞戰爭は義戰◇生存と成長の權利◇戰前に於ける米國の對日要求◇出來ぬ相談の强制◇米國の横暴◇米英の常套手段たる恫喝◇米國大艦隊の派遣◇大東亞戰爭開始と米英の狼狽◇勝ち拔く爲に第一根氣、第二國內團結◇興國の國難に直面◇興亞の曉鐘は鳴る

IMT 542

大東亞戰爭の由來と我等の覺悟 ……（四七）

◇驚嘆す可き海軍の實力◇日本の交讓と米國の横車◇日本遂に立てり◇加藤寛治大將と松岡前外相◇廣大無邊の皇德に感激す◇大東亞戰爭は仁義の軍◇人種差別に對する日本の大抗議◇モンロー主義から帝國主義へ◇比律賓領有と日本に對する恐怖◇日露戰役の大勝利と米國の對日不滿◇日本に邪魔する爲に生存した米國◇華府會議と我等の悲憤◇對日牽制たる移民法とシベリア出兵◇米國世界制覇の野望◇米國に對する予の警告◇分離せしめて支配す◇長期戰と我等の覺悟◇皇國一億皆英雄

大東亞指導者としての日本の使命 ……（七七）

◇米英の擊滅の好機來る◇勝つ爲の三要件◇我等の日本精神◇長期戰は覺

IMT 548

悟の前◇屯田持久の策◇咎めて咎めに做ふ勿れ◇皇道發揚と大東亞指導の四條件◇鷹揚な態度を持て◇力を以つて米英を擊滅◇德を以つて東亞を綏撫◇一命を捧げて奉公の決意

戰時微言

一億國民の義憤……（四四）
大捷に處するの道……（四六）
大東亞戰の眞意義を沒却する勿れ……（四八）
思想戰の行衛……（一〇〇）
南と北……（一〇三）
新嘉坡の陷落……（一〇五）
國語第一……（一〇八）
潤ひある政治……（一一〇）
皇國女德の長養……（一一三）
軍機と政機……（一一五）
猛斷威決……（一一七）
皇室中心と民族中心……（一二〇）
獨立乎、隷從乎……（一二一）
教育者の教育……（一二五）

IMT 548

印度は今が起つ可き時……（一三七）
米國の迷夢覺醒の機……（一三九）
平和の戰爭……（一四二）
招かざるの客……（一四四）
教育三重點……（一四六）
土に親しましめよ……（一四九）
占領地域の和平工作……（一四一）
印度の獨立には實力を要す……（一四三）
百年戰爭……（一四六）
關東軍に感謝す……（一四八）

東亞の光

……（一五三）
◇怪雲妖霧を排除◇常勝を誇つた英國◇歴史に無き英國の敗北◇世界の二大横綱相手の勝負◇英米依存論者と予の反對◇正を以つて合し奇を以つて勝つ◇デモクラシーの腐敗◇英米精神の徹底的排擊◇英語及び英語文化の驅逐◇遠心力と求心力との發揮◇東亞の中心としての日本◇英米人の欺瞞◇皇室中心の精神を養へ

IMT 542

聖戰詩鈔

◇聖詔渙發◇海軍凱歌◇勅題『迎峰雲』◇香港陷落◇新正二首◇馬尼剌陷落◇星港陷落二首◇旭旗風◇太平洋凱歌◇照大東

附載

英國の虚喝をしりぞけよ……（一九一）
◇支那の背後に在るもの◇恐英病者と英國の實體◇獨逸、伊太利の對英强硬◇外交の軟弱◇英國新聞の曲筆(一)◇英國新聞の曲筆(二)◇『廣東の前途』の記述◇支那の滋養灌腸を絶て◇東亞を我物顔する英國◇交讓妥協を廢す可し
皇室中心の高揚と恐英病の排擊……（二〇九）

IMT 542

◇皇室中心主義の高揚◇日本國民は皇室中心に一致す◇皇室中心の思想は肇國以來◇振古未曾有の大事業◇取るにはそれ丈の代價を要す◇國民總てが生みの惱みに堪へよ◇十九世紀と東亞の爭奪◇英國の東亞侵略◇日本の儼存と東亞の自覺◇日本の重大責任◇日英關係とウイリアム・アダムス◇阿片戰爭と日本の恐怖◇維新以來の英國と其の狡猾◇ワシントン會議の裏切り◇英國外交の常套手段◇他を道伴れとする英國◇英國の虛喝◇當てにならぬ英國◇第一次世界大戰と伊太利の苦杯◇獨逸の甦生◇日本を手本とした獨伊兩國◇日本精神を研究する獨伊◇日本は皇室中心以外に何物も無し

皇政維新の理想と亞細亞の興隆……（二五六）

◇比類無き皇軍の大勝利◇楚の項羽とカール十二世の例◇恐英病の一掃◇

IMT 542

英國恐るゝに足らず◇千萬人と雖も吾往かん◇恐る可き征服思想◇日本は大なる和の國◇明治天皇の御盛德◇征服思想は輸入思想◇アジアの盟主たる襟度◇二大病の退治が急務◇維新史と唯物史觀◇版籍奉還を如何に解釋する乎◇英國と封建制度の踏襲◇普天の下皇土に非らざるは無し◇唯物史觀では解釋出來ず◇皇政維新と其の理想◇アメリカ獨立運動の理想◇英國佛國、中國革命の理想◇大運動には大理想あり◇文永弘安の役と元弘建武◇皇權恢復と國家擁護◇到著點の一致◇二者不可分◇停車場は明治元年◇日本は君國一致◇忠君愛國の大理想◇倫理的國家としての日本◇皇道の發揚が終局の目的◇西鄕南洲の達見◇日本と亞細亞興隆の理想◇日本の歷史には斷層無し◇維新の大事業は繼續中

東亞の操觚者各位に告ぐ……（二五八）

IMT 542

◇非常時に於ける操觚者の任務◇日本國體の徴象◇日本國體の特色◇西力東漸と東亞の災厄◇日本の蹶起と東亞の復興◇東亞の自覺と中國の歐米依存◇分離せしめて支配す◇漁夫の利を占むる英米◇今後の世界と封建的傾向◇東亞の團結を要す◇白晳人種の横暴◇東亞の一致協力を祈望

IMT 542

大詔渙發

IMT 542

昭和研究會圖書消却之印
昭和研究會圖書館藏書之印

大詔を捧讀して

○大詔渙發と大義名分の明示

米英兩國に對する我が皇國の宣戰は、實に我が國史上、振古未曾有の一大難事であり、更に又た一大盛事である。而して昭和十六年十二月八日渙發あらせられたる宣戰の大詔は、實に巍々蕩々、光々明々、寔に此の大事件に相當必適する一大文字である。

我等は恭しく之を捧讀するに、其の文字平坦にして簡約なるも、其の詞正大、其の義明朗、之を再讀し、之を三讀すれば、隱々として其の中に血湧き肉躍るの感あり、洵に一億國民をして、慨然腕を扼して振起せしむるものあるを認む。翹だに昭

IMT 542

和御代の詔勅中に於いてのみならず、又た明治以後の詔勅中に於いてのみならず、即ち我が國史に散見する凡有る詔勅の中に於いて、畏れながら最も特色ある一として、感激已む可からざるものである。

我等は此の大詔に對して、逐一其の文義に就て叨りに訓釋を施すの必要を認めず。但だ全體に亙つて、我等が感銘感戴したる要點に就き、聊か解說を試みる事を以つて、我等の本分に應へんことを期す。

「抑々此の大詔に依つて、我等一億皇民の對米英戰爭は、實に義戰なる事を確信す。否な我等一億皇民のみならず、我が興國は勿論、自餘の中立國さへも、苟くも虛心平氣に之を捧讀したらんには、此の戰爭が世界史に極めて稀なる義戰である事を知るに餘りあらん。即ち我が敵國たる米英諸國の國民と雖も、又た等しく我が皇軍の正義の戰であることを、否認する事は能はぬであらう。

要するに此の戰爭は、(第一)我が皇國の自存自衛の爲の戰爭である。(第二)此の戰爭は東亞十億生靈解放の爲の戰爭である。(第三)此の戰爭は世界人類廿一億の平和の爲の戰爭である。之をしも義戰と言はずんば、何をか義戰と言はんやだ。大詔は實に我等一億皇民に向つてのみならず、世界廿一億の國民に向つて、大義名分を明訓し給うた。

◇世界平和の攪亂者たる米國

「抑々米英兩國は、世界の暴君であり、又た世界の公敵である。」然も彼等は其の人口に於いて、殆んど世界の三分の一を有し、其の面積に於いて、世界の十分の六を有し、其の富に於いて世界の三分の二以上を有してゐる。而して今や米英と云ふも、英は實に從來の位地を顚倒して、米の屬國とも云ふ可き位地に墜落し、悉く皆な米の鼻息を窺ひ、米の意志に從ひ、唯だ戰々兢々として米の感情を害し、其の機嫌を損ぜざらん事を勗めてゐる。

IMT 548

IMT 548

されば世或は英に向つて、偶ま其の意見に反對する者もあり。而して萬已むを得ずして、獨逸の如きは、一昨年（昭和十四年）九月に至つて戰端を開くに至つた。然も現在精强を以て世界に冠たる新興の獨逸さへも、米國に對しては、尙ほ極めて其の驩心を損ぜざらん事を力め、所謂る『さはらぬ神に祟り無し』の諺通り、之を敬遠しつゝも、尙ほ彼に對して起つ事を敢てし無かつた。獨逸尙ほ然り。況んや餘國に於いてをや。

故に、米國は今や世界無二の暴君として、增上我慢至らざるところなく、遂に世界制覇の大野心を勃起し、その飽くなき魔手を歐洲大陸に及ぼし、更に東亞に及ぼしてゐる。而して彼自ら民主國の造兵廠と稱してゐる。然も世界の禍亂は、十中八九まで、悉く皆な米國に依つて製造せられ、米國に依つて繼續せられ、米國に依つて擴大せられつゝある。若し米國が英國を援助しなかつたならば、英獨の戰爭は數個月にして終りを告げたであらう。若し米國が歐洲の諸小國、例せばポーランド、

IMT 542

チエツコ・スロヴアキヤ、ギリシヤ、ベルギーその他を教唆し、濫りに援助を約しなかつたならば、彼等も亦た必らず濫りに禍亂の火玉とはならなかつたであらう。

即ち東亞に於ける我が支那事變が、足掛五年を費し、戰費數百億、兵士百萬、戰へば必らず勝ち、攻むれば必らず取り、戰術と戰略との上に於いて、何等遺算無きに拘らず、猶ほ今日蔣政權が殘存し、隨所に匪賊の橫行を見るは、米國の後援に是れ由るのみ。米國の手は更にソ聯にも伸び、英國では米國が餘りにソ聯に力を藉した爲に、英國に對する米國の聲援が減少せられたりとて、今や怨言を吐きつゝある狀態だ。

此の如き事實を枚擧し來れば、米國が世界禍亂の本家本元である事は、世界二十一億の者皆な之を知る。即ち一億四千萬の米國人中に於いても、之を能く知つてゐる者も決して少くない。若し公然米國人の心を正直に打明けたらんには、尠くとも其の半數は、ルーズヴエルト大統領の爲に、米國が歩一歩地獄の底に落ち行きつゝ

IMT 542

あるを、恐れざる者はあるまい。果して然らば米國は實に世界の公敵である。

◇對米英宣戰と獨伊兩國

米國は世界の公敵であると同時に、我が東亞の公敵であり、我が皇國の敵である。

我が　天皇陛下は、聖德天の如く、至仁地を掩ふ。常に東亞の安定と世界の平和とに聖慮を效させ給ふ事は、我等一億皇民の戴翊、感泣する所である。然も今や祖宗以來傳承し給へる此の皇國の成長を妨害するのみならず、其の生存をも危殆ならしめんとする米英の惡辣殘暴なる措置に對しては、遂に宣戰の大詔渙發の已む可からざるに至つた。

されば聖詔中にも、『洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ』と、特に昭明し給うた。卽ち此の戰は仁者無敵の戰である。翅だに義戰のみならず、又た仁者の戰である。卽ち我國が此の如く物件も人件も、一切を犧牲として、世界の公敵を芟

IMT 548

除せんが爲に、立ち上りたるに際し、我と同盟國の獨逸と伊太利とは、宣戰大詔渙發未だ四日ならざるに、忽ち彼等も進んで米國に向つて宣戰し、又た我國と與に宣戰目的の完遂を期し、苟くもそれに到達せざる迄は、決して獨自一己の行動を逞しうせず、戰ふにも共に戰ひ、和するにも共に和するを盟約した。此の如くにして昭和十五年九月二十九日締結せられたる三國條約を更に强化し、更に具體化し、昭和十六年十二月十一日に於いて、舊盟を尋ね、新約を堅くし、愈々世界新秩序の建立に向つて乘り出し來つた。

◇皇軍無敵

此の如くにして我が皇國は、我が英明なる　天皇陛下の聖斷に依つて、我が同盟二國を誘引し、世界の進運に一大劃時期を發生し來つた。我等が我が國家にとつて大難事であると同時に、大盛事であると云つたのは、如上の理由あるが爲だ。

IMT 548

然も大詔渙發と同時に、我が陸海の將兵は、ハワイを討ち、シンガポールを襲ひ、香港を侵し、マレーに上陸し、グワムを取り、フイリツピンは攻略中に屬し、而して敵の東洋艦隊を殆んど半死半生の底に打ち沈めた。其の勢恰も疾風の枯葉を捲くが如く、怒濤の砂洲を呑むが如く、實に世界の驚嘆に値するものがある。我が皇軍の誓ふ所敵無きもの、獨り我が將士の忠勇無双であるばかりで無く、古今に比類無き仁義の戰にして、所謂る天に代つて暴を伐つもの。理正に然る可きものがある。

◇戰勝と東亞共榮圏建設

我等が明治二十七八年役に於いて、清國と戰ふや、世界は侏儒が巨人に向つて戰ふを危んだ。而して世界の不信用を裏切り、遂に全勝を博した。三十七八年役に露國と戰端を開かんとするや、世界を擧げて——即ち當時は我と同盟國であつた英國でさへも——尙ほ我に到底勝算無きものと認め、我國の軍務の責任者さへも、全勝

IMT 542

を必とせず、唯だ最善を竭して、皇國の運命を賭せんとした。而して此の戰爭も亦た日本の大勝に依つて、全世界の不信用を裏切つた。

今や米英の强大國は、三十七八年の露國に比すれば、更に十倍と云はんよりも、寧ろ百倍の力を有つてゐると稱せられてゐる。然るに我等は一週間を出でずして、彼等の東洋に於ける其の勢力を撃滅し、其の根據を踏破しつゝある。然も我等は決して幸先の快勝に滿足す可きでない。我等は一方に於いて戰ふと同時に、他方に於いては平和的施設を伴はしめ、所謂る東亞共榮圏の成立に於いて、遺算無きを期せねばならぬ。

即ち今日の戰爭は、戰爭の爲の戰爭で無く、從つて今日の戰爭には必らず平和的行政、經濟的政策を行ひ、以つて其の資源を開發し、其の人民を綏撫し、自給自足百年戰爭の繼續するも、決して憂とするに足らざるだけの準備を施さねばならぬ。

斯くせんとするには、當局者が自ら賢なりとせず、知識を世界に求め、特に人材

IMT 542

を全國に徹し、其の全きを期せねばならぬ。それには協調が第一である。その協調の中に於いても、尤も必要の點を擧ぐれば、(第一)海陸軍の協調。(第二)文武の協調。(第三)官民の協調。(第四)東亞に於ける與國との協調。(第五)歐洲に於ける與國卽ち獨、伊との協調を暫くも忘る可きでない。聖德太子が我等に貽し給へる十七條憲法中第一條の『以ゝ和爲ゝ貴』の言葉は、今日程大切なことは無い。戰爭の用は殺戮にあるも、之を行ふ所以は、和に依つて成り、和に依つて目的を達するものである。所謂る仁者無敵の師、正に此の如きものである。

◇堅忍持久と國內一致の要

翻つて惟ふに、我が敵國たる米と英とは、機に臨み、變に應ずる電擊戰爭は、彼等の得意とする所で無い。然も堅忍持久、相手方の漸く倦怠する時に、彼等は始めて目を覺まし來たることが往々にしてある。彼等は今後、蔣介石が現在行ひつゝある筆法を、更に大なる範圍に於いて之を應用するも未だ知る可からざるものがあらう。我等は朝氣は銳、暮氣は衰の言葉に鑑みて、何時迄も何處迄も、大詔渙發當時の心を以つて、之を最後迄持ち續けねばならぬ。

更に慮る可き事が一つある。彼等は思想戰、宣傳戰に於いて、卓越したる長技を有つてゐる。從つて彼等が之を以て我が國內の人心を煽動し、我が皇民の一致を破壞し、外は鐵壁の堅さを以て戰ひつゝあるに、內自ら壞崩するが如き事無からんを慮らねばならぬ。彼等は第一次世界大戰に於いて、此の術策を用ひて成功したるもの。之を我に用ひて成功する事無き樣、我等は豫じめそれに對して準備せねばならぬ。

◇我等の標語

今日我々の目前に掲ぐ可き標語は『皇軍必勝』『目的完遂』の二句だ。我等は假令戰爭が百年繼續するも、尙ほ此の二個の標語を把持して、徹底的に大詔を奉じ、之に

奬順し、之を奉行せねばならぬ。人或は國難と言ふ。然も國難何ぞ恐るゝに足らん。況んや今日の國難は亡國の國難で無く、興國の國難である。我が皇國が東亞の指導者たる可き位地を確立し、世界新秩序の先頭者たる可き貢獻を效すの國難である。國難何ぞ恐るゝに足らん。恐る可きは人心の荒忘のみ。我等は繰返して言ふ、我等の標語は『皇軍必勝』『目的完遂』の二つあるのみ。（昭和十六年十二月十二日）

IMT 542

大東亞戰爭と日露戰爭

◇日露戰爭と歷史的繼續

歷史は繰返し、歷史は繼續し、歷史は發展す。若し之を水平的に觀察せんか、總てとは云はぬが、多くの點に於いて、大東亞戰爭は、日露戰爭の繰返しである。若し之を立體的に觀察せんか、大東亞戰爭は、日露戰爭の繼續であり、又た其の發展である。

「我等は兩者共に義戰たる事を、良心的に確信する。それは兩戰共に、相手方より無理押しに押付けられたる戰爭であり、言ひ換ふれば、正當防禦である。」抑々日本は、德川十一代將軍家齊時代より、露國を北方の赤狄として、恐怖の念に驅られて

IMT 542

ゐた。されば露國に向つて、戰を挑むなどといふ氣持は、一人たりとも無く、但だ如何にせば露國の憂を免るゝを得んかといふ事を心配し、露國は恰も夢魘の如く、我が國民の安眠を妨げてゐた。斯る場合であつたから、我國には露國と共同するを以つて、我が國是と爲さんとする者と、英國と共同して露國に對抗せんとする者との差別はあつたが、押しなべて我より進んで露國に戰を挑まんとする者は無かつた。それで桂内閣がいよ〳〵廟議を決し、露國と談判を開くに際しても、露國が苟くも朝鮮より手を引かんとするならば、滿洲は露國に讓つて、平和の約束を成立せしめんと期した。

然るに露國では滿洲は愚か、朝鮮に於ける領土の一部たりとも、これを軍略上に使用することは出來ぬ。又た北緯三十九度以北の同地方を中立地帶とす可しといふ說を固執して動かなかつたので、已むを得ず、此の上は戰ふの外無しといふ決心を固めたのである。然るにその結果は、豫想外にも露國の勢力を朝鮮より驅逐したばか

IMT 548

りでなく、日本の勢力を長春卽ち今の新京までも延長することが出來たのである。若し露國が桂や小村や若しくは伊藤、山縣の意見通りに、朝鮮から手を引いたならば、日露戰爭は、少くとも當時に於いて始まらなかつた。而して我國の歷史は勿論、東亞の歷史も聊か今日と趣を異にしたかも知れぬ。されば我等は此の意味に於いて、何よりも頑冥不靈にして、戰爭を挑發したるアレキセーフ、ベソラゾーフ等の徒に向つて、感謝せねばならぬ。

◇大東亞戰爭と歷史的發展

大東亞戰爭に於いても亦た然りだ。日本には曾て露國を恐怖した者が多かつたが、露國と親んだ者は絕無とは云はぬが、極めて少かつた。之に反して米英に就ては、我が國家の支配階級、知識階級、富と力の階級の人々は、所謂る英米依存で、恐るると云はんよりも寧ろ親しんでゐた。されば如何に彼等が日本に向つて無理難題を

IMT 548

持掛けても、彼等に向つて戰端を開く抔といふ事は、最も好まざる所であつた。然るにも拘らず、彼等はスポンヂを壓搾すれば何處までも縮小する如く、日本に對しては唯だ押しの一手であると考へ、威嚇と恫喝とを武器として盛んに我に挑戰し、遂に壓迫の極度に至つて、今や皇國の自生、自存、自立を脅かすに至つた。そこで已むを得ず干戈を執つて起つたのである。

若しルーズヴエルトが、野村、來栖兩大使の提案に同意したならば、フイリツピンも米國の領土として、其儘存在したであらう。香港も英國の領土として、存在したであらう。グアム、ウエーキの諸島も米國の飛石となり、ハワイも亦た米國の太平洋岸に於ける一大安樂地として存在し、マレー半島も、シンガポールも、ビルマも現狀を維持し、プリンス・オブ・ウエールス號も、レパルス號も、若しくは米國の東洋艦隊も、依然として其の雄姿を海上に浮べてゐたであらう。然るに彼等が餘りに日本を見縊りたる爲に、彼等の勢力は一掃せられるに至つた。今日では全く一掃せ

IMT 542

られたとは云はぬが、一掃せらる可きは必然の事と云ひ得らるゝ。されば我等は東亞より英米の勢力を一掃する事に就て、其の殊勳者はルーズヴエルト、チヤーチルの徒と云はねばならぬ。

此の意味に於いて、大東亞戰爭も、日露戰爭も、全く同樣の順序を繰返してゐる。且つ日露戰爭に於いては、日本には日英同盟があつた。現在に於いては、日獨伊三國同盟がある。我等は固より獨力で戰ふ者である。日英同盟あつたが爲に、英國から一隻の軍艦も、一門の大砲も我等は加勢に賴んだ事がない。現在も亦た然り。併しながら同盟のあつたといふ事だけは同樣である。

◇桂内閣と東條内閣

日露戰爭の當時に於いては、日本は全く總幕出揃であつた。元老としては、伊藤、山縣、松方、井上、大山、大隈等の諸巨頭があつた。然るに今日に於いては、彼等

IMT 542

に比す可き所謂る巨頭なる者は無い。されど國民全般の位地は當時に比して、向上したる事を忘れてはならぬ。されば今日は當時程の巨頭無しと雖も、國民一般が皆な敵愾の精神を鼓吹し、忠烈國難に赴くを勇み進んでゐるからには、得る所失ふ所に比して、寧ろ多しと云はねばならぬ。

當時の桂内閣も、概して小粒揃にて、世間からは曾て緞帳内閣と云はれ、恐らく三日天下で沒落するであらうと豫言せられた。然るにそれが從來の内閣に比して最も長き内閣であつた事は、假令其の中間に日露戰爭があつた爲とは云へ、意外であつた。我等は我が東條内閣も亦然らん事を期待する。東條内閣は謂はゞ實用内閣で看板内閣では無い。世間では此の内閣が何事を成し得るかと考へてゐたが、日支事變以來、近衛内閣、平沼内閣、阿部内閣、米内内閣及び第二次近衛内閣、第三次近衛内閣を經て、行ふ能はざる所を行ひ得たのである。それは時節が到來し、機會に遭遇した爲と云へるが、其の時節に順應し、其の機會を促へ得た事も忘れてはならぬ。我等は東條内閣が第一次桂内閣と同樣に、尠くとも、大東亞戰爭の目的完遂迄、存在せんことを期待し、我が國民も亦た之を支持し、其の目的を完遂せしめん事を努めねばならぬ。

IMT 542

◇日本と大陸的發展

日本は日露戰爭に於いて始めて大陸的勢力の足掛りを得た。されどそれが愈々具體化するには、多大の曲折を經、漸く昭和六年九月十八日柳條溝の事件に依つて、其の局面を展開した。即ちポーツマス條約締結より柳條溝事件に至る歲月は、足掛け二十七年、隨分長き丁場であつた。然るに歷史は繼續し、延長し、發展し、擴大し、支那事變は遂に起つて、英米の蔣介石援助となり、我が大東亞戰爭は、日露戰爭が大陸を以つて戰場と爲したる如く、海洋を以つて戰場と爲しつゝある。

即ち日露戰爭は我が國力の北進の端を開きたるものにして、大東亞戰爭は、我が

IMT 542

國力の南進の端を發きつゝあるものである。然も我が大和民族は、其の祖先の一部は北よりし、他の一部は南よりしたるものにして、我等は初から大陸民族であると同時に、海洋民族である。北進と云ふも南進と云ふも、要するに我等の祖先の墳墓の地に向つて進む者である事を想起して、我等は我が大和民族の宿命が、斷じて此に存する事を疑ふ事が出來ぬ。

◇戰勝と我等の覺悟

今や米英の頑冥不靈の爲に、遂に我等に向つて、開拓す可き渺茫たる海洋を寄與しつゝある。英國の香港を占領する一百年、今や旭日族は翻々として、ヴイクトリア・ピークの頂上に翻つてゐる。米國のフイリッピン、ハワイに於ける正に遠からずして香港の前例を蹈む事は、分明である。我等は固より彼等と進んで爭はんとする者では無く、彼等自ら戰を挑んで、彼等自ら退却するに至つたのである。所謂る自

IMT 542

業自得とは此の事である。但だ我等は此の際彼等が如何に東亞諸民族を壓迫し、東亞諸民族を搾取したる乎を顧み、省めて其の咎に做ふ事無く、所謂る我が皇道を以つて彼等の覇道に代へ、眞に東亞十億民族解放の局面を此に展開せねばならぬ。

斯る場合に於いて、我等が考へねばならぬ事は、其の目的を徹底的に完遂する事である。即ち小功に誇り、小成に狎れ、直ちに米英と握手して我が臥榻の傍に彼等の鼾睡を容るゝ抔の事無き樣に、今から覺悟せねばならぬ。我等は滿洲に於いて、張作霖、張學良の爲に、如何に苦き經驗を嘗めた乎。或る場合には、滿洲を放棄せねばならぬ立場に立至つた事もある。在滿の我が同胞は行李を提げて、歸國の覺悟をした事さへある。若し萬一我等が東洋に於いて、米英の勢力を假借する時には、他日如何なる禍亂を長養するか、測り知る可からざるものがある。我等は滿洲に於ける苦き經驗を繰返す事無く、進んでアングロ・サクソンの勢力を一掃する迄、已まざらん事を覺悟せねばならぬ。

IMT 542

◇思想國防と利己的管見の警戒

それには一方に於いては、東亞共榮圏の諸邦の心を得ねばならぬ。諸邦とは卽ち滿洲國、南京政府、泰國との三同盟國は勿論、凡有る東亞諸民族の民心を得る事を勵めねばならぬ。更に進んで印度の獨立をも援助するだけの度胸を持たねばならぬ。これと同時に我が與國たる獨逸、伊太利とは、勿論氣息を通じ、共通の目的に向つて戮協せねばならぬ。

然も最も必要なる事は、內部の結束である。別言すれば、思想國防である。國內の人心を警醒し、如何なる場合にも敵の宣傳を擊退せねばならぬ。如何なる惡宣傳も、我に健全なる思想が旺盛なる時には、我に感染する虞れが無い。所謂る『木朽ち蟲之に生じ、人疑うて讒之に入る』の類にして、國民先づ其の思想の混亂、怠慢、腐敗を來たして、然る後敵の宣傳に乘ぜられるものである。故に思想の國防は最も

IMT 542

內部を結束する事が必要である。それには爲政者に一任するだけで無く、國民總てが其の責任者として、互に戒しめ、互に愼しみ、互に警醒せねばならぬ。

特に斯る場合に於いて、最も警戒す可きことは、利己的管見である。曾てペルシヤの外敵を退けて、アテネが海洋諸都市の牛耳を執るや、アテネは自ら盟主たるの權威を專らにし、其の同盟諸都市を搾取して、之を自己の防禦に使用した。其の爲にアテネは遂に海洋諸都市の信賴を失墜し、孤立するに至つた。所謂る少しく取つて大いに損したと云はねばならぬ。

◇東亞の樞軸たる日本

斯る歷史的先例は、現在に於いても我等にとつては大なる龜鑑である。惟ふに世界的傾向は、小國の獨立を愈々困難ならしめ、從つて至る處に大國が發展する傾向である。此の如き例は英國が先づ始めてゐる。英國は昭和七年(西曆一九三二年)オ

IMT 542

タワ會議の際に於いて、大英帝國内の自由貿易を始め、大英帝國内を打つて一丸と爲し、互に有無相通じ、自餘の諸國を排斥するに至つた。其の爲に他の諸國も亦た銘々經濟圏を設くるの必要を感じ、其の範圏を擴大ならしむる事となつた。

第一次世界大戦の際に、米國大統領ウィルソンが宣言したる民族自決などは、今や一場の夢に化した。今日は大なる一國、若しくは聯邦、然らざれば聯邦にも等しき緊密なる同盟圏が出で來り、其の間に於いて、自立、自存、自衛、自活の道を講ぜねばならぬ。所謂る東亞共榮圏の建設とは其の事である。此の如き大國若しくは大同盟の樞軸となり得る國は何處に在る乎。我が同盟の獨逸、伊太利の如きは、固より其一である事を疑はぬ。然も東亞に於いて樞軸となる可きは、我が大日本皇國あるのみだ。我等は此の大なる責任に向つて、凡有る努力を拂はねばならぬ。此の如くにして初めて大東亞戦爭の目的を完遂する事が出來る。（昭和十六年十二月二十七日）

IMT 542

興亞の曉鐘

IMT 542

（編者註）本講演は昭和十六年十二月十日、即ち米英に對する宣戰の大詔渙發後二日、東京小石川の後樂園に於ける各新聞社共同主催「米英撃滅國民大會」の席上、蘇峰翁がそのトップを切り、後樂園スタヂアムを埋めた國民大衆に呼びかけ、聽衆に多大の感銘を與へたるものである。翁が野に在つて叫び續けた宿願の米英撃滅の火蓋の切らるゝ時、翁の感激も亦た非常なるものがあつた。

IMT 542

興亞の曉鐘

◇大東亞戰爭は義戰

何よりも先づ第一に、私は忠烈無双の我が皇軍の將兵各位に向つて、深厚なる感謝を捧げる者であります。

今回の對米英の戰爭は、大義名分が歴然としてゐるところの義戰であります。我等は東亞のための東亞を建設せんとする者であり、彼等は米英のための東亞として飽くまでも東亞を彼等の意の如くせんとする者であります。故に第一今回の義戰は東亞の敵、且また世界の公敵を伐つものであります。世界禍亂の根源は何處にありますか。世界禍亂の本家本元は、實に米國であります。歐洲に於いて、英國及びソ

IMT 542

聯に對して凡有る援助を與へてその戰亂を益々擴大しつゝあるのは、米國であります。東亞に於いて我等の東亞建設を妨害し、飽くまでも蔣介石を主盟とする重慶政府を援助して、我に抵抗を續けしめてゐるのも、米國であります。此の如く世界戰爭の問屋は、世界平和の攪亂者、世界平和の公敵たる、米國そのものであります。

第二に今回の義戰は、特に東亞に於きまして、東亞十億民族の解放のために戰ふものであります。

第三に今回の義戰は、我が國家の自衞自存のために戰ふものであります。

以上申し述べました樣に、東亞民族の解放、亞細亞解放を旗印として、アングロ・サクソンの世界制覇の非望に一石を投ずる、一億國民のこの戰こそ、正に歷史的なものと云はずして何んでありませうか。

IMT 542

◇生存と成長の權利

「人間に生存の權利と成長の權利がある如く、國家にも亦た生存の權利と成長の權利とがあるのであります。然るに米英人は、飽くまで我國を强壓して、その成長權を無視してゐるのであります。伸び樣とする日本を强ひて押へ付けて、日本を罐詰にせんと企てゝゐるのであります。

顧みて日露戰爭の當時を考へて見ますのに、日露戰爭は何が故に起つたでありませう乎。卽ち日露戰爭は朝鮮問題がその原因でありました。日本は滿韓交換までも讓步しましたけれ共、露國が承諾しなかつた爲に、遂に宣戰の聖詔渙發となつたのであります。而してその結果は如何であつた乎。日本は大國露西亞を破つて、眠れる獅子の假面を世界の前に剝いだのであります。

IMT 542

◇戰前に於ける米國の對日要求

然るに今回の開戰前に於ける米國の態度、米國の要求は何んでありましたらう乎。第一に、彼等は我等に對して、支那から全面的に撤兵せよと要求しました。我等は足掛け五個年に亙る聖戰を支那の各地に續け、莫大なる戰費と十餘萬の英靈の血肉を犧牲として、東亞新秩序の建設の第一歩を、着々と實行しつゝあるのであります。然るに彼等はその支那より、全面的に撤兵せよと申すのであります。

第二に、大詔が渙發せられて、我國が國是として稽ふ所を示されたる、日獨伊三國同盟を廢棄せよといふのであります。つまり日本は三國同盟より脱退せよと申すのであります。

第三に、彼等は南京政府は認めない。滿洲帝國も認めない。即ち滿洲事變以前に立還れと申すのであります。而して日本を東亞に於いて米國と同一の立場に立たし

IMT 542

めんとするのであります。南京政府は我國の支那大陸に於ける聖戰の目的を諒解し、東亞共榮圏の一員として、我等と提携せるものであつて、我が皇國はこれと善隣の誼を結んだものであります。且つ、南京政府を承認せる友好諸國は、既に十一個國に及んでゐるのであります。

滿洲國は如何である乎。改めて申す迄もなく、滿洲は最早建國十年を迎へ、今や確固たる一帝國であります。斯るものを認めるとか、認めないとかといふことは、申すも愚かなことであります。然もこの愚かしきことを、彼等は我等に向つて要求したのであります。

◇出來ぬ相談の强制

即ち彼等は二十餘年前の九國條約を以つて、飽迄も日本を律せんとするものであります。これを個人に就て考へて見まするに、赤坊から大人になる迄にはそれ〴〵

IMT 542

の變化があります。赤坊の時にはミルクを飲んでをります。併し大人になつてからはミルクだけでは生きてをられないのであります。子供の時には、小さい靴を履いてをります。併し大人になつてもそれを履けと申すのは、仁王様に子供の草鞋を履けと申す如きものであります。子供の時の着物を大人になつても着てをれと申すのは、双葉山に子供の着物を着てをれと申す如きものであります。

これは出來ない話と申すよりも、非常識の極まるものであります。然るに米國は既に死文となつてゐる九國條約を楯にとつて、支那全土よりの全面的撤兵、日獨伊三國同盟の廢棄、南京政府及び滿洲國の否認を我國に要求し續けたのであります。既成の事實である滿洲國を認めず、これを滿洲事變以前の姿に戻せといふが如きは生れた子供が既に成長して大學生になつてゐるのに、これを再び母の胎内に戻せと云ふが如きものであります。斯る事は誰が考へても出來ない相談であることは、國より論を俟たぬところであります。

IMT 542

◇佛の顏も三度

然も彼等は東亞を永久に隷屬的地位に置かんとして、その頑冥不靈なる態度を改めず、我が皇國の支那事變の完遂を妨碍し、更にA・B・C・Dの包圍陣を堅め、皇國の四邊に武力を增强して、皇國の存立を脅威し來つたのであります。更に經濟的に凡有る壓迫を加へて、遂に經濟斷交の擧に出でたのであります。

隱忍にも程がある。自重にも程がある。私は我國も餘りに隱忍し、自重し過ぎたと思ふのであります。佛の顏も三度といふことがある。私は支那事變の完遂のためには、その背後にある英米二國を衝かねばならぬことを繰返して申して來たものであります。今日に於いては英國は既に米國の屬國である。故に私は英國に就ては、最早や申しませぬ。東亞をして東亞の東亞たらしめず、東亞をして永く彼等の搾取の下に置かんとした張本人は、米國であります。私は米英二國を遣付けることの遲か

IMT 542

つたことを殘念に思ひますが、今更過ぎ去つたことを申しても致方ありませぬ。私はこれ以上は過去のことを申しませぬ。たゞ今日畏くも宣戰の聖詔を拜して、實に感激に堪へざる次第であります。

◇米英の常套手段たる恫喝

元來米英兩國の常套手段は何んである乎。彼等の奥の手は何時も恫喝であります。彼等は今日まで恫喝をもつて成功して來たのであります。恫喝を以つて今日自らその大を爲したものであります。

即ち米國が日本に對する第一の恫喝は、今を去ること八十八九年前、米國の水師提督ペルリが、四隻の黑船を率ゐて、浦賀灣に來つた時に始まつてをります。

日本を茶にして來たか蒸汽船
たつた四はいで夜も寢られず

IMT 542

これは皆樣も御承知の通り、當時四隻の黑船に驚いた日本の上下の狼狽を諷したものであります。

ペルリは日本の恩人だなどと申す人がありますが、ペルリは米國の利益の爲に、四隻の黑船を率ゐて、日本を脅しに來たのであります。而して彼の恫喝はその時に於きましては成功致したのであります。

◇米國大艦隊の派遣

それから種々の事がありましたが、明治四十年には米國は世界巡航といふ名の下に、大艦隊を日本に送つて寄越しました。日本は生意氣であるから、脅かしてやれといふので、この大艦隊を派遣したのであります。

然るに當時我國の政治家はなか〳〵偉かつたのであります。堂々と舳艫相銜んでこの大艦隊が日本に來た時に、日本では大歡迎したのであります。『まあお茶を一

IMT 542

杯召上れ』『まあ〻酒を一つ召上れ』といふ譯で、盛んに御馳走をしたのである。その場所は小石川の後樂園、即ち此の場所でありました。

そしてその時伊藤公は、かういふ詩まで作つてをります。

萬里蒼波繫二兩情一。　水心不レ負太平名。
欲レ言無レ語滿二吾意一。　把レ酒聊茲尋二舊盟一。

斯る次第で、日本は上下を擧げて彼等を大驩迎したので、彼等もすつかり氣を好くして、亞米利加に跡つて行つたのであります。併し彼等の本心は實に日本に示威恫喝を目的として來たにあつたのであります。

◇大東亞戰爭開始と米英の狼狽

米國は日本は恫喝しさへすれば何んでも彼等の云ふ通りになるものと考へてをりました。そして常に恫喝を以つて、今迄は成功して來たのであります。而して今度

IMT 542

も恫喝しさへすれば、日本は參るものと信じてをりました。そこで彼等は凡有る手段、凡有る方法を以つて日本を恫喝し、日本を威嚇したのであります。

併し流石の彼等も今度だけは、その恫喝に失敗したのであります。日本を甘く見縊つてゐた彼等は、こゝに始めて日本の實力を見て、今更の如く周章狼狽、驚天動地の極に達したのであります。

開戰以來相續く快捷の報は、寔に我等にとつて痛快至極、三斗の溜飲を一度に下げた思ひが致します。我が勇猛果敢なる皇軍の必勝の意氣の下に、彼等は爲すところを知らぬ有樣であります。これ偏に御稜威の然らしむところであり、我等は一死君國に報ぜんとの信念に燃えて、海に、陸に、空に、赫々たる戰果を擴大しつゝある皇軍將士の各位に向つて、深甚なる感謝を繰返さゞるを得ないのであります。

◇勝ち拔く爲に第一根氣、第二國內團結

IMT 542

而して我々は今始まつた戰爭を、長く續けねばなりませぬ。五年續くか、十年續くか、私共はこの戰爭を勝ち拔かねばならないのであります。

それには第一根氣が大切であります。謂はゞこの戰爭は日本と米英との根氣較べであります。我等は勝利の報に驕らず、徒らに昂奮せず、じつくりと腰を落着けて彼等と根氣の較べつこを致さねばなりませぬ。必勝の前に我々は第一にこの根氣を養ふことが必要であります。

第二には國内團結であります。我等は三千年の光榮ある歴史を賭して、この戰爭をしてをります。それには先づ國内が一致團結して、國民の力を打つて一丸として、この外敵に當らねばなりませぬ。

斯る際に於きまして、若し共產主義とか、社會主義とかを奉ずる者あらば、我々は斷々乎としてこれを排擊せねばなりませぬ。且また今日に於いても尙ほ所謂る米英の第五列といふが如き者あらば、我等は徹底的にこれを絕滅せねばなりませぬ。

IMT 542

我等は斯る國家の重大時局に於きまして、此の如き不逞の徒が、我が忠良なる國民の中に一人も居らざることを信ずるものではありますが、これは洵にこれからの長期戰を戰ひ拔かうとする我々にとつて、最も戒心す可きことであると信じます。

◇興國の國難に直面

以上申上げました事で、私が言はんと欲することは、略ぼ言ひ盡したと存じます。これ以上は今日は申上げませぬが、最後に唯だ一言申上げたい事があります。

今日頻りに國難といふことが叫ばれてをります。私も決して國難でないといふことは申上げませぬ。併しながら此の國難といふことに就ては、誤解のない樣に御願ひしたいと思ふのであります。

私は皆樣に國難には二つの意味の國難があるといふことを、特に申上げて見たいと思ひます。

IMT
IMT 542

即ち一は亡國の國難であります。國家が滅亡するといふ時に於ける國難であります。他は興國の國難であります。國家が興隆する時に於ける國難であります。國難には此の二つの種類の國難があるのであります。

亡國の國難の例を申しますれば、元に攻められた時に、宋の文天祥が叫んだ如き國難が、即ち亡國の國難であります。哀切悲痛の亡國の國難がこれであります。興國の國難とは、今日の日本が直面してゐるところの國難がそれであります。

今日の日本の國難は、進取的、活動的、飛躍的の國難であります。我等の前途は固より多難であります。然も必ず勝つといふ信念と、必ず戰ひ拔くといふ覺悟とを以つて、この多難を克服した曉こそ、我が日本が亞細亞の指導者として、東亞をアングロ・サクソンの長く久しき桎梏より解放して、東亞をして東亞の東亞たらしむるの秋であります。

IMT 542

◇興亞の曉鐘は鳴る

今日我等の標語は『皇軍必勝』『目的完遂』の二つであります。我等は我が忠勇無比なる皇軍に、絶對の信頼を捧げ、その必勝を確信すると同時に、我等も亦た如何なる難關に打突かつても、必ず目的を完遂するために、我等の最善を竭す可きであります。

我等一億の國民は、この興國の國難を、しつかりと手を繫いで乘り切らうではありませんか。今こそ興亞の曉鐘は鳴り響いて、輝かしい興亞の朝が明け樣としてゐるのであります。

IMT 542

大東亞戰爭の由來と我等の覺悟

IMT 542

（編者註）　大東亞戰爭の開戰は、皇國振古未曾有の大事業として、國民の士氣は天に冲する概があつた。東京日日新聞社は昭和十六年十二月十八日、國民的感激の新たなる最中に、蘇峰翁に請うて日比谷公會堂に大講演會を開いた。本講演が即ちそれであり、これは大東亞戰爭開始の約一個月前十一月十日、同じく日比谷公會堂にて講演せる『太平洋を眺めて』の大獅子吼と照應す可きものである。此の日翁は約二時間餘、大東亞戰爭の由來を詳述し、我が國民のこれに對する一大決心を促して、聽く者をして君國の爲に殉ず可き覺悟を新たならしめた。立錐の餘地無き會場に入り切れぬ聽衆は、第二會場たる日比谷音樂堂のマイクを通じ、說く人、聽く人、渾然一體となり、『み民われ』の感激に燃えた、記念す可き大講演であつた。

IMT 542

大東亞戰爭の由來と我等の覺悟、

◇驚嘆す可き海軍の實力

曾つて私は太平洋の波高きことを告げ、併せて國民の覺悟を切望致しました。然るにそれから幾許もなく、十二月八日、畏くも米英に對する宣戰の大詔は渙發され、日本は決然と立つて正義の劍を拔いたのであります。

元來此の大東亞戰爭は、單に一時的の感情を以つて出來た戰爭ではありませぬ。又た一時的の感情を以つて終る可きものでもありませぬ。何故に私共は米英と戰はねばならなかつた乎。私共はそれを冷靜に考へねばなりませぬ。その原因を考へる時、私共は單に米國を伐つたり、英國を叩き伏せるといふだけでは足りませぬ。私

IMT 542

共は米英を徹底的に撃滅せねばならぬのであります。

私は茲に何故に大東亞戰爭が開かれたかといふことを、先づ申上げて見度いと思ひますが、それよりも先に、私は今度の戰爭に就いて、三つの驚く可き事を、一言致したいと存じます。

第一の驚きは、我が陸海軍の大捷であります。一度び宣戰の大詔が渙發されますや、盡忠報國、一身を君國に捧げた我が皇軍の將士は、海に、空に、陸に、驚嘆す可き戰果を獲得し、且つ獲得しつゝあります。特にその當初に於ける我が海軍のハワイ海戰、マレー沖海戰の大勝利は、世界の戰史にも未だ見ざるところの大戰果でありました。

古より海戰も多くあります。我國に於ける源平の屋島の海戰、支那に於ける赤壁の戰、或はネルソンのトラフアルガーの海戰、又た我が明治三十七八年戰役に於ける日本海の海戰等、澤山の海戰がありますが、此度のハワイ及びマレー沖に於ける

IMT 542

海戰ほど、目覺ましきものは殆んどありません。私は我が皇軍の前に心からお辭儀を致します。脫帽どころではありませぬ。私共の髮の毛の一本一本を拔いても、衷心からの感謝を捧げねばならぬと信じます。

我が皇軍の傳統的聲價は、其の舞臺が廣大であると同樣に廣大であります。それにつけても私が感慨に堪へませんのは、昭和十六年八月三日に私が『我等は無敵海軍に信賴す』と書きました時には、米國に對する氣兼ねの爲に、無敵海軍の四字は削られて、『我等は信賴す』といふ題に改めさせられたことであります。其の當時私は實に怪しからぬことゝ思つたのでありますが、世運一轉、只今誰が『無敵海軍』の四字を削除し得るでありませう。

我が皇軍は我人共に豫想した以上に、其の聲價を發揮しつゝあります。これが第一の驚きであります。

IMT 542

◇日本の交譲と米國の横車

第二に私が驚いたことは、我國があまりに米國に氣兼ねをし過ぎたことであります。交譲妥協と申しますが、我國のやり方は、これではとてもたまつたものではないと思つてをりました。斯く申しましても、私は決してそれを以つて當局者を攻撃しようなどといふ者ではありませぬ。誤解なきやう願ひます。

第三は米國の横車のひどいのに驚いたのであります。豫ねて米國は横車を押すことに就ては、非常なものであることは承知してをりましたが、斯く迄横車を押すとは、如何にも大膽至極であると驚いたのであります。

彼等の横車とは何んでありますか。第一は支那及び佛印より全面的に撤兵せよと申すことであります。斯く致しましたならば、大東亞の新秩序を建設する爲に、五個年に亙つて戰つてゐる聖戰の意義はどうなるでありませうか。莫大な戰費と十餘

IMT 542

萬の尊い英靈を捧げて戰つてゐる目的を完遂すること無くして、撤兵などは思ひもよらぬことであります。

第二に彼等は南京政府を否認し、滿洲國を否認し、總て滿洲事變以前に立還つて重慶政府以外のものは認めるなど申しました。南京政府は大東亞新秩序建設の爲に日本と善隣の誼を結んだものであり、日華條約に依つて堅く結ばれたものであります。滿洲國は建國十年を迎へて、儼然たる一帝國であり、日本と不可分の兄弟國であります。これを滿洲事變以前の狀態に立還れなどとは、横車も此迄で行けば、最早や滑稽と申す外ありませぬ。

第三は既に畏くも大詔を拜して、我が國是となつてゐる日獨伊三國同盟から脱退せよと申すのであります。私共は忝けなくも大詔に依つて其の嚮ふ所を示されてをります。それを脱退しろと彼等は申すのであります。

かういふ次第で、日米の談判は、日本が一歩退けば、米國は十歩を進め、日本が

IMT 542

十歩退けば、米國は百歩を進めて來るといふわけで、まるで喧嘩の押賣り同樣でありました。

◇日本遂に立てり

事茲に到りましては、如何に私共が米國と戰爭をしたくなくても、これ程までに押賣りされては、立上らざるを得ないのであります。乃ち日本は米國の喧嘩の押賣りに對して、敢然として立つたのであります。元來日本は最近二三年間は、頗る憂鬱でありました。何んとなくはつきりした氣分がありませんでした。

然るに遂に聖斷一決、私共は宣戰の大詔を拜しまして、雲霧を排して青天を仰ぐ心地が致します。聖慮を拜して唯々恐懼感激に堪へないのであります。私共は我國を經濟と武力とを以つて、手も足も出ぬ樣に圍んでゐる米英の包圍陣を突破せん爲、卽ち我國の自守自衛の爲に、そして亞細亞十億の同胞を米英の桎梏より解放せ

IMT 548

んが爲に、世界平和の攪亂者、世界人道の公敵たる米英に對し、天に代つて鐵槌を下すべく立つたのであります。私共一億の皇民は打つて一丸となつて、米英を撃滅せねば已まぬ者であります。

◇加藤寛治大將と松岡前外相

斯くして立上つた皇軍の素晴らしき戰果は、今更の樣に世界を驚かしてをりますが、此の際私共は二人の人を想起せねばなりませぬ。第一は故加藤寛治大將であります。大將は華府會議に於いて、血涙を呑んで歸朝した人であり、爾來彼は凡有る非難を浴びつゝ、默々として海軍の猛訓練を續けた本家本元であります。繼て倫敦會議となり、當時大將は軍令部長でありましたが、遂に其の犧牲者となつたと申せば何もかもよく判ると思ひます。彼は將來期するところがあつて、一生懸命に海軍の實力養成に意を用ひつゝ、淋しく其の晩年を送つたのであります。然も今日大將

IMT 548

を地下より起して皇國海軍の赫々たる戰果を見せたならば、彼は如何に滿足するでありませう。私共は海軍をして今日あらしめた唯一の人とは申しませんが、其の主なる一人である加藤寛治大將に向つて、感謝しなければならぬと思ひます。

第二は前外務大臣たる松岡洋右氏であります。松岡外相に就ては、毀譽褒貶まちまちでありますが、政治家にはいつでも褒められる點と、非難される點とがあるのであります。然も三國同盟を結んだのも松岡前外相であり、ロソ不可侵條約を結んだのも彼であります。私共は此際松岡前外相に對しても、一言の御禮を申す可きであります。

◇廣大無邊の皇德に感激す

併し以上申上げましたことは、寔に小なることであります。凡そ國家の大事件がある毎に、我が皇室の御稜威は赫々として太陽の如く廣大無邊であります。國家の

IMT 548

大事に際して、全國民の中心として國民を率ゐ給ふのは、實に我が皇室で在らせられます。明治維新に於きまして、多くの志士英傑が雲の如く全國に起りましたが、然も其の中心として彼等を率ゐ給うたのは、實に　孝明天皇で在らせられました。燦然たる明治の御代は、改めて申す迄も無く、　明治天皇の聖德大業に依るものであります。

特に今回の開戰と日露の開戰とを考へましても、實に其の感を深く致します。日露戰爭當時に於いても、重臣の中にも親露論者がありました。重臣の中に親露派と親英派とがあつて、なか〳〵議論が決しませんでした。然も　明治天皇の御聖斷に依つて、遂に日露開戰となりました。そして其の結果は御承知の通りであります。

今回の開戰に於いても、我國には親英米論者があり、なか〳〵一致出來ませんでしたが、遂に聖斷一下、億兆は其の帶ふ所を示されたのであります。その結果も亦た知る可きであります。私共は今更我が皇德の廣大なるに感激を禁ずることが出來

IMT 548

ないのであります。同時に輔弼の大任に膺つた東條首相に對しても、私共は感謝しなければならぬと思ひます。

◇大東亞戰爭は仁義の軍

前にも申上げた通り、今回の大東亞戰爭は、皇國自存自衛の爲、東亞の民族十億解放の爲、世界二十一億の人類の平和の爲の戰爭でありまして、私は之を稱して仁義の軍と申すのであります。日露戰爭は日本の自衛が主でありました。今回の大東亞戰爭は、自衛は勿論でありますが、更に東亞民族の解放の爲であり、世界平和の爲であり、一層崇高なる目的の爲に戰はれつゝあるものであります。

◇人種差別に對する日本の大抗議

そこで茲に根本的に訂正しなければならぬ問題があります。それは何かと申しま

IMT 542

すと、人種の差別であります。固よりヒツトラー總統は、日本精神の認識者でありムッソリーニ首相は、皇軍と共に肩を並べて戰ふことを光榮とする人でありますから、我が同盟國は別と致しまして、これから申上げるのは、それ以外の米英人に就て申上げるのでありますから、誤解の無い樣に願ひます。

私は今から六十年ばかり前に、ギヨーの「地人論」といふ書物を讀みましたが、その中に次の樣に書かれてゐるのを、今日でもはつきりと覺えてをります。

植物は動物の爲に存する。動物は人類の爲に存する。人類の中でも有色人種は白哲人種の爲に存する。

これが卽ちアングロ・サクソン人の原理原則なのであります。これを言葉を換へて申しますと、菜つ葉は鷄の爲に存するものである。鷄はチキン・カツとか、チキンライスとかになつて人間に食べられる爲に存するものである。人間の中でも東亞人は歐米人の爲に存するものだといふ議論であります。鷄が人間に向つて未だ曾つて

IMT 548

抗議したことがありません。これと同樣に、東亞人も一切を宿命の如く心得て、歐米人に抗議しなかつたのは、不思議と云へば、實に不思議なことでありました。

然もその不合理に對する大抗議は、我が日本に依つて行はれました。それは卽ち明治三十七八年戰役であります。日露戰爭に於いて、眇たる日本が世界の大國である露國を打破つたといふことは、東亞人に自覺を呼び起す曉鐘となつたのであります。そしてそれはやがて隣國に於いては孫逸仙の大亞細亞主義にまで發展して行つたのであります。此の點に於いて孫逸仙は日本に對して感謝してゐるのであります。して、此の事は孫逸仙の愛弟子である只今の南京國民政府の汪主席がよく知つてゐる筈であります。

◇モンロー主義から帝國主義へ

然るに日露戰爭以來、日本に公然、隱然、挑戰して來た者があります。それは誰

かと申しますれば、實に米國でありました。米國は國祖ワシントン以來、北米大陸以外に手を出さぬことを主義としてをります。モンローが唱へた所謂るモンロー主義といふのは、『米國は歐洲の事には干涉せぬから、君等も米國に手を出すな』といふ主義であります。米國はこれを原則としてやつて來たものであります。

それが十九世紀の下半期から末期になりますと、英國に帝國主義が流行致しまして、それが米國にも傳染して參りました。英國に於いては、シーレーの『大英膨脹論』抔が盛んに讀まれ、帝國主義はやがて米國にも追々と波及して行つたのであります。此で皆樣が記憶して置く可き米國の三人男があります。一人はマハン大佐。一人は元老院議員ロッジ。一人は前の大統領ルーズヴェルト。此の三人であります。

兎に角米國に帝國主義が流行するや、明治三十一年(西歷一八九八年)に布哇を併合し、又た米西戰爭によつて比律賓を割取し、グアム、サモア、ウエーキ、ミッドウエー等を割取するに至つたのであります。米西戰爭などといふのは、御承知であり

ませうが、自分の方で種々の策謀をして、それを西班牙のせゐにして、遂に戰端を開いて、忽ち比律賓その他を割取したのであります。然も流石の米國も世界の手前比律賓は金を出して買取つたのでありますが、その金は、日本の金持でも一人で出せる位の僅かのものでありました。

◇比律賓領有と日本に對する恐怖

かうして米國は一擧にして太平洋の勢力となつたのでありますが、太平洋に手を伸ばして見ると、日本といふものが恐くなつて來たのであります。比律賓は日本にとつては、猫の鼻先に鰹節を置く樣なものでありますから、米國は氣が氣で無かつたのであります。然も當時我國の憂は北方にあつて、日本海方面の急の爲に、太平洋を顧みるに遑なき狀態でありました。併し米國の方では、日本を以つて太平洋將來の競爭者と認めてゐたのであります。

IMT 542

そこで明治三十八年七月に米國のタフトが日本に立寄つた時に、時の首相桂と七月二十九日に會見して、比律賓と朝鮮問題に就て密約を致しました。それは日本は比律賓には手を出さぬから、米國も日本が朝鮮でやることに干渉してくれるなといふことでありました。これをタフトからルーズヴエルトに申してやつたところが、三十一日にタフトに返事が來て、『君の言は予が言なりと傳へよ』といふことでありました。米國にとつてはもつけの幸でありましたからして、此の密約は成立したのであります。

◇日露戰役の大勝利と米國の對日不滿

元來私共は前獨逸皇帝を以て黃禍論者と申してをりますが、その本家本元は初代ルーズヴエルトであります。そこでルーズヴエルトが日露の媾和談判の仲介者となつたのも、日本に對して義俠心を發揮した爲でも何んでもありません。あまり日本

IMT 542

が勝ち過ぎては困るから、いゝ加減なところで止めさせようとしたのであります。彼は日本が大陸的勢力となることは、好まなかつたのであります。そこで日本に恩を着せて、獲物を得ようとし、日本を懐柔して、太平洋に出さぬ工夫をしたのであります。

ところが米國の輿論はルーズヴェルトがさう考へるよりも以前に、すつかり變つてしまひました。日露戰爭までは日本に味方してゐた米國人も、日本が大勝利を得るとすつかり豹變してしまひ、媾和談判の時には露國の全權ウイッテに應援して、『何んだ日本なんかに讓歩するな。日本に負けるな』と囃し立て、太平洋岸に於いては日本人の壓迫が始つて、流石のルーズヴェルトも手が及ばぬ程でありました。

◇日本に邪魔する爲に生存した米國

米國は段々日本を親の仇以上につけねらひ、滿洲に手を伸ばさうとし、最初には

IMT 542

御承知の通りハリマンが來て滿鐵を買收しようとしました。それが失敗すると、それに平行線を作らうとしたり、種々の策謀を致したのであります。ハリマンの次にはストレートやナックスなどが來て、盛んに滿洲に手を出し、日本を滿洲から爆り出さうとしたのであります。かういふ譯で米國は恰度日本の邪魔をする爲めに生存してゐるやうなものでありました。

併し初代のルーズヴェルトは日本の眞友ではありませんでしたが、日本に對する認識はありました。彼はその次に大統領になつたタフトに向つて、

日本人と喧嘩をして米國が滿洲を爭はふとするならば、獨逸の陸軍と英國の海軍とを米國が併せ持たねばならぬ。それだけの準備が無い時は、日本との喧嘩は無用である。

と忠告しました。然るに此のタフトはドル外交で、ドルで日本人の頭を張りさへすればいゝといふ樣な漢でありました。從つて日本に對する認識などは少しもありま

IMT 542

せんでした。

その次の大統領、ウイルソンに至つては、徹上徹下日本人嫌ひであり、且つ彼は日本人の敵でありました。又た北京駐劄の公使として赴任したラインシュといふ漢も亦た、日本の不利を謀ることを、其の職分とした樣な人でありました。それは兎も角、日本の勢力を大陸から追拂ふことを極力勵め、人種平等論に反對したのも、ウイルソンその人でありました。而して米國の念願は日英同盟を廢棄させることでありましたが、英國も世界大戰では日本の恩惠を受けてゐるので、日本を裏切る能はざるものがありました。併し何んと云つても大戰で米國から莫大な借金をしてゐるので、米國の御機嫌を取ることが大切であり、遂に日英同盟を廢棄して、米國の御機嫌を取り結んだのであります。然も英國に於いて日英同盟を廢棄す可しといふ論者の一人は、實に今日の英國首相チャーチルその人でありました。寔に因果應報は覿面であり、『ざまを見ろ』と云ひたい程であります。

IMT 542

◇華府會議と我等の悲憤

次に我等の忘るゝ事の出來ない悲憤は、大正十年から十一年にかけての華府會議であります。これは三國干渉以上の痛憤事でありました。これに依つて米國は一石四鳥で、第一、英國の海軍を米國と同等にし、第二、日本を劣等として五・五・三の比率に致しました。第三、日英同盟を廢棄せしめ、第四、四個國條約から九個國條約となつて、日本を東亞大陸から驅逐することに成功したのであります。

日本は謂はゞ華府會議に於きまして、米英の惡謀共謀に依つて丸裸にされたのであります。然も『人を呪はゞ穴二つ』の諺通りで、今日から考へて見れば、この會議は日本勃興史の第一頁となり、同時に米英國衰落史の第一頁となつたと云ふ可きでありませう。

IMT 542

◇對日牽制たる移民法とシベリア出兵

更に米國は日本の大震火災には、種々なものを日本に送つて來ましたが、其の墨、年には移民法を制定して、日本を立法的に米國から締出したのであります。此の時埴原大使が大統領に親書を送り、その中に、『改めなければ重大な結果を來すであらう』と書いたのを、『重大な結果』とは何んであるかと云つて、その揚足を取つたのが、先刻申上げた米國三人男の一人ロッジであり、その爲に埴原大使は憤涙を呑んで逝いた程であります。

シベリア出兵に就ても、米國のシベリア出兵は、たゞ日本を牽制する爲の運動であり、實に御苦勞千萬と申す外ありません。併しながら如何に米國が日本の行手を邪魔しても、日本は何處にでも伸びて行くのであり、自分の力で行手を拓いて行くのであります。

IMT 542

◇米國世界制覇の野望

米國の世界制覇の野心は、恐らく第一次世界大戰後、華府會議頃から始つたと思ひます。爾來米國は成金氣分で世界を眼下に見下し、世界に號令する樣になつて來たのであります。米國は大戰に於いて、英國に對しても、佛國に對しても、債權者でありますから、歐洲のことは心配無かつたのでありますが、東亞に於いては日本だけが氣に喰はず、只管日本の首を押へることのみを事として來たのであります。

然も日本人は米英を嚴師良友と考へてをりましたから、如何に米人が日本に對して不利なことをしても、日本ではそれを善意に解し、所謂る『話せば判る』と考へてをりました。これは全く日本が認識不足の至りでありました。

◇米國に對する予の警告

IMT 542

但だ日本に於いても、少數の者は米國の世界制覇の野心を熟知して、その前途を憂慮してをりました。そしてその中の一人は、乃ち斯く申す私であります。私は大正九年七月に『大戰後の世界と日本』といふ書を著はし、その中で米國に反省を促してをります。其の一節に、

日本國民は本來平和的民族也。日本國民は世界の何れの國民に比しても、其の辛抱力は不足せざる也。但だ日本國民は正を踏んで懼れざる底の道義的勇氣を有す。米國にして若し此の日本國民の道義的勇氣を濫用し、冒瀆せざる限りは、日米の國交は無事平穏ならむ。吾人は米人に多きを望まず。只だ彼等若し果して基督教國民ならば、基督の金誡、卽ち己が欲する所を以て之を他に施すの一事を想起して、之を日米の國交に應用せよ。是れ千秋萬古、兩國間に平和を維持するの要諦也。

云々と述べてをります。又た米國のマクミラン書店より、"Japanese-American

IMT 548

Relation"（日米關係）といふ一書を發行しました。併しこれ等は暗中に投ずる光程の効能も無かつた樣であります。

最近に於いては竹下海軍大將を立會人として、米國大使グルー氏に會見して、日米の事は白紙に立還つて出直してはどうかと忠告したのであります。其の中にグルー大使が賜暇歸國しましたから、彼が歸國したならば、日米關係も改善される所があらうと期待してをりましたところ、彼が東京に歸つて昭和十四年十月十九日、帝國ホテルに於て開かれた日米協會主催の同大使驛迎會の席上、我國朝野の名士三百名に對して述べた演說の要旨を私は新聞で讀みました。ところが彼は國民學校の先生が、國民學校の生徒を訓諭する樣な態度で、我國の所謂る名士を訓諭してをります。つまり日本人は東亞に出しや張るな、元の通り引込んでゐろといふことを長々と語つたのでありまして、彼は歸國して日本嫌ひの色揚げして來たとでも申す可きでありました。彼の演說を聽いて、中には大いに拍手し、又たは『よく云つてくれ

IMT 548

た』と云つて握手した人もあるといふことでありますが、全く呆れたものでありました。私はとてもこれでは駄目だと、すつかり見切りをつけたのであります。

◇分離せしめて支配す

滿洲事變、支那事變に對する米國の態度に就ては、餘りに新しいことでありまして、皆樣よく御承知の通りであります。而してその結局に於いて日米の談判となつたのであります。元來英米人の常套手段は何かと云へば『分離せしめて支配せよ』といふことであります。東洋に於いて彼等の手段は皆な此の通りであります。日本と中華民國とが一致してゐたならば、今日は既に大東亞を建設してゐたかも知れません。然も米國は支那をして歐米に依存せしめ、日本に對して反抗せしめて、自分が利益を得て來たのであります。

印度も亦た此の手に乘つてをります。三億五千の印度人は、未だ其の夢が覺めず、

IMT 542

彼等に使役されてゐる有樣であります。彼等は日本にも屢々此の手を用ひました。特に滿洲事變以來は、彼等は我が國民と軍部とを離間し、其の隙に乘ぜんとして、種々の惡謀陰謀を逞しくしたことは、英米人の最近外交史を見れば、火を睹るよりも明かであり、私共もよく承知してゐる通りであります。

然も彼等には眞に我が國民性が諒解出來ないのであり、同時に我が國力が判らないのであります。我が日本國民は、一度び　至尊の大詔を奉ずれば、如何なることをも捨てゝ一死只だ君國に報ずるを光榮とするものであります。彼等には此の事が判らず、宣戰の大詔渙發と同時に立上つた日本の實力を見て、始めて周章狼狽してゐる次第であります。

私共は此の際我が東亞の諸民族十億の人々に呼掛けたいと思ひます。

『何故に此の機會に立上らざる乎』

『特に印度三億五千の諸君は、何時迄英人の奴隷となつてゐる乎』

IMT 542

私共はかう叫びたいのであります。

◇長期戰と我等の覺悟

戰爭は一朝一夕で終るものではありません。固より私共は長期戰を覺悟してをります。然もそれには東亞に於いては滿洲國、中華民國、佛印、泰と手を組み、歐洲に於いては獨逸、伊太利と手を結んで、此の味方の結合を堅くして、龜裂の入らぬ樣心掛けねばなりません。

次には、米英の惡宣傳、惡策謀に乘らぬ樣、注意せねばなりませぬ。更に必要なことは、國家總動員の實を擧ぐる爲には、軍隊の力のみでなく、國民の力を擧げて之を應用せねばなりませぬ。

私共は米英に對して、別に恐れるものがありません。但だ彼等は頑張る力が強いのであります。英國の如きは大陸諸國を相手として、數百年戰爭して來た國民であ

IMT 542

ります。故に最後の問題は根氣較べであります。それに就ては、私共は先づ內をがつちりと堅める必要があります。而して私共は『皇師必勝』『目的完遂』の二つの標語を掲げて、十年は愚か、百年でも辛抱して、彼等を擊滅せねばならぬのであります。それが二千六百餘年の振古未曾有の大事業を完遂する所以の方法であると信じます。

◇皇民一億皆英雄

私共は日本の男の一分として、敢然として立つたのであります。堪忍袋の緒を切つた日本の實力は、世界の驚嘆の的となつてをります。私は皇軍の大勝を祝して、

捨レ身決レ死奏二奇功一。
擊二滅敵船一指顧中。
休レ說英雄不二世出一。

IMT 542

皇民一億皆英雄。

と詠じました。

私共は天皇陛下の御旗の下に一命を捧げることを光榮とする者であります。今こそ我等一億皆な英雄となつて、米英を撃滅し、以て聖旨に應へ奉る可きであります。

IMT 542

大東亞指導者としての日本の使命

IMT 542

（編者註）本篇は昭和十七年一月二日、午後七時半より八時迄、東京中央放送局に於いて、放送せる講演の筆記である。時に蘇峰翁は八十歳の新春を迎へ、例年ならば既に熱海樂閑莊に修史の筆を携へて赴く可き處、大東亞戰爭の勃發に依り、山王草堂に在つて、皇軍快捷の報に皇國の萬歲を奉唱しつゝある新年劈頭のラヂオ放送である。

大東亞指導者としての日本の使命

◇米英擊滅の好機來る

本年は、皇國が大東亞の指導者として起上つた歴史の劈頭でありまして、一入目出度く存じます。私は及れながら　大元帥陛下の萬歲を唱へ奉り、次いで皇軍萬歲と、皇民萬歲、東亞十億の萬歲を唱へたいと思ひます。而して米國のルーズヴエルト大統領、英國のチヤーチル首相にも、ちよつと一言御挨拶をしておきます。その理由は、若し彼等があくまで横車を押さず、我が申出したる條件に折合つて呉れたならば、香港も依然英領であり、グアム、ウエーキも依然として米國の飛石であり、フイリツピン、ハワイ、シンガポール、マレー諸島に至るまで、その儘であつたに

相違ありません。然るに彼等が無謀にも横車を押しました爲に、こゝに初めてアングロ・サクソンの舊勢力を一掃するの機會が到來したのであります。日本に取つては、これが洵に仕合せでありました。彼等に取つては、これが洵に不仕合せでありました。天運が啓けて行く時には、敵の横車さへも、却て味方の利益となることがあります。私共は今や天命人心に應じて、振古未曾有の世界的大革新の事業に飛込んで居ります。これ程、私共に取つて愉快なることはなく、又これ程責任の重大なるを感ずることもありませぬ。

◇日本を見縊つた米英

抑々英米諸國が我等を見縊つて、如何に横車を押しても、日本は決して起上るものではないと思つてゐたのは、畢竟彼等が我々の力を過少に見縊つた爲であります。それは彼等としては、決して不思議はありません。デモクラシーは元來數を第

IMT 542

一としてをります。投票も多數で當選し、議會の議案も多數で決します。總てのことを數から割出して來るものでありまして、日本と米國や英國とを比較して見ますならば、人口の上に於いても、飛行機や、戰鬪艦や、凡有る武器軍需品に於いても、彼等が多數を占めて居ることは勿論であります。それで戰爭はせずとも、算盤勘定の上に於いて、全く勝利は彼に在るものと、彼等が定めて居たのであります。況んや富に於いても、その資源は無盡藏であり、且つ黄金の如きは、二百五十四億ドルをケンタッキーの山の奥に埋藏して置くと云ふが如きことでありまして、とても日本と比較出來ません。彼等はそのために威嚇恫喝に依つて、我々を押し潰すことが出來ると考へたのは、彼等としては尤も千萬なことであります。

◇勝つ爲の三要件

併しながら彼等には『千羊の皮は一狐の腋に如かず』と云ふことが解りません。

IMT 542

此の意味は、羊千匹の皮でも、一匹の狐の腋下の皮ほどの立派なものを見出すことは出來ないと云ふことであります。量よりも質が大切だといふことであります。併し彼等は物の量よりも質が大切であることに、氣が附かなかつたのであります。凡そ勝敗には物的の力と心的の力とがあります。然るに彼等は唯物的の力のみを知つて、心的の力は更にそれよりも大であることを、勘定に入れなかつたのであります。

戰爭をして勝利を得るには、第一には精神力であります。第二は科學の力であります。第三は物資、卽ち富の力であります。この三つのものが圓滿具足すれば必ず勝利を博することが出來ます。然るにアングロ・サクソン人はその順序を顚倒して、第一富、第二科學、第三は人と申しましても、殆どそれは勘定に入れて居らぬ程であります。如何なる立派な戰鬪艦を造りましても、戰鬪艦自ら鬪ふものではありません。如何に雄大なる爆擊機や戰車がありましても、それは自動的に働くものではありません。如何なる科學的研究の結果も、これを應用するのは人であります。然

IMT 542

るに人間を無視して、何事が出來ませう。人と申しますが、人の頭數ではありません。人の心であります。人の精神であります。然るに彼等は、日本の人口や富のみを勘定して、大切な大切な所謂る日本精神と云ふことを、彼等の帳簿に附け落して置いたのであります。その爲に彼等は乘んだ失敗をしたわけであります。

◇我等の日本精神

今度の戰爭は、一口に申せば、物と人との戰爭であります。然るにその大切なる要素を、彼等は全く忘却して居たのであります。私共は、今日以後に於きましても富の增殖が最も大切であることを確信して居ります。又た科學的研究は尙更大切であることを確信してをります。併しそれよりも更に大切なることは、戰鬪的精神であります。卽ち我が皇國臣民の一億が　大元帥陛下の御旗の下に一切を盡し、一切を捧げ、而してこれを以つて銘々の本分とすることが大切であります。某中佐の異

IMT 542

珠灣攻擊の話を承りましても、その事は最も痛切に我々に實物教訓を與へて居ります。佛教では生死第一と申しまする。私共に於きましては、生くるも君の爲であり、死するも君の爲であります。我等の一身は、總て君の爲に奉仕するものであると云ふ信念を持つことが、戰鬪的精神の第一要素であります。即ち日本精神とは、このことであります。

◇長期戰は覺悟の前

扨この戰爭は、長期となることは覺悟の前であります。彼等は有らん限りの富、有らん限りの科學研究の力を以つて凡有る戰爭の道具を拵へ、凡有る準備を爲し、凡有る便宜を圖るでありませう。即ちチャーチル首相の如きも、今後三年に於いて始めて英米兩國は樞軸國に向つて反擊が出來ると公言して居る通りであります。されば、それを悉く撃滅し去るには、仲々手數が掛かることは勿論であります。併しな

IMT 542

がら彼等が物資に富めば、我等も亦、それに對抗するだけの物資が追ひ追ひ出來て來つゝあります。彼等が科學的研究をすれば、我等も亦、同樣にやります。而してそれ以上に、それ以外に、彼等に持合せのない所謂る日本精神を以つて、我等一億の皇民が一心と爲り、一體と爲つて、戰ふ時に於きましては、必ず彼等をやりつけ得ることは、斷々乎として間違ひありません。

◇屯田持久の策

私はこの戰爭に就いては初め善く、中頃善く、終りも彌々善いと信じて居ります。我等自ら雄心の撓まない限りは、我等自ら內に忘り、內に潰え、我等が精神的に敗亡者にならざる限りは、必ず我々の目的を完遂することが出來ることを斷じて疑ひません。而して我等は、その爲に長期戰と爲ることは、百も承知のことであつて、固より今日から覺悟をして居るのであります。諸葛孔明の所謂る屯田策であつて、今

IMT 542

同の戰爭は、一方には戰爭を爲しつゝ、他方には平和工作を爲し、一方に於いては富を消費しつゝ、同時に又富を生產し、一方に物資を消費しつゝ、同時にそれを增殖して、恰もその源泉滾々として、汲めども汲めども盡きざるやうにやらねばなりません。卽ち此の如くしてやる時には、何の屈托することもなく、何の心配することもなく、その戰爭が五年や七年は愚か、一世紀續いても、百五十年續いても、二百年續いても、少しも此方に於いて損することはありません。

◇咎めて咎めに倣ふ勿れ

此の如くこの度の戰爭は一方では破壞を爲し、他方では建設を爲し、又た一方では舊體制を破壞し去り、他方では新體制を建設し來る。此の如き方法を執つてやる時に於いては、我等は何も長期戰たることを恐れざるのみならず、長期戰であればある程、我々に取つては、最も利益多きことになります。唯この際私共が、聊か

IMT 542

自ら顧みてみなければならぬ、又自ら注意してみなければならぬことがあります。それは私共は我が皇國が東亞の指導者となる爲には、苟も他の咎めに倣ふといふが如きことがあつてはなりませぬ。卽ち私共は英米人を東亞から一掃し去つた後に、私共が復た英米人の眞似をするやうなことがあつてはなりませぬ。彼等英米人は、東亞を植民地と申してをりまするが、その實は植民地ではありません。彼等は東亞を牧場と心得て居たのであります。卽ち東亞十億の人類を、牛や馬、豚や羊と心得て居たのであります。其の爲に彼等は凡有る虐政を爲し、凡有る暴政を爲し、凡有る勝手を弄し、凡有る術策を施し、恰も東亞十億人類の血を搾り、血を吸うて、而して自ら滿足して居たものでありまして、所謂る彼等は吸血鬼であります。

かるが故に、私共東亞の指導者たる者は、それと全く反對の措置を執らねばなりませぬ。皆樣も百も御承知の通り、イギリス人が如何に阿片を支那に押賣りして、遂に支那を阿片國としてしまつて、支那四億人の健康を害し、彼等をして自ら振ふ

IMT 542

ことが出來ないやうにさせた事實を御覽なさい。インド三億五千萬の人類を彼等が如何に互に爭はしめ、而してその爭ひに乘じて、遂にその私利を逞しくしつゝあるか、御承知のことでありませう。その他事實を擧げ來らば、數ふるに遑あらざる程であります。現にフイリツピンの如きも、何が爲に取つたか。アメリカ人はこれを取るときに、誰れがこれを取らせたかと云へば、神の道を說くところの宣教師共が、アメリカ政府に向つて、是非共フイリツピンを征服してしまへと申したのであつて、當時大統領マツキンレーは、取るが可からうか、取らぬが可からうかと思ひ惱んで、ホワイト・ハウスの廊下を夜中行つたり來たりして、何うしても思案が定まらず、遂にお祈りをして、その結果、これを取つたと云ふことであります。何う云ふ風に祈つたか、その祈りだけは私には判りません。神樣だけが御承知であらうと思ひます。

◇皇道發揚と大東亞指導の四條件

さう云ふ調子でやつて來たのであるからして、私共は全く我が皇道を以て、これを導かなければなりませぬ。皇道とは大なる、公なる道と云ふことよりも、我が天皇陛下の皇の字、即ちすめらぎの道であります。支那の政治家の管仲さへも、斯う云ふことを申してをります。『與ふるの取りたるを知るは政の實なり』即ち何よりも先に與へねばならぬ。私共は東亞十億の同胞からして、物を取るといふ考へよりも、彼等に物を與へる、與れてやると云ふことを考へなければなりませぬ。アングロ・サクソンは取るがために彼等を支配した。我等は與ふるために、彼等を指導しなければなりませぬ。第一、與ふるものは秩序であります。第二、安寧であります。第三、安心であります。第四、心身一體の幸福であります。この四つのものを私共は與へねばなりませぬ。再び申しますと、第一に秩序、第二に安寧、第三は安心、第

四は心身一體の幸福、これだけを私共が東亞共榮圏内の諸民族諸君に向つて與ふる時に於いては、卽ち我々が十分に彼等の指導者たるところの立場を固むることが出來るのであります。

◇鷹揚な態度を持て

この際に於いて、私は一言我が同胞各位に向つて申したいことがあります。兎角我々日本人は、親切の押賣りをする癖があります。親切も善いけれども親切の押賣りは困ります。又我々は己を以つて他を律する癖があります。氣短かで思ひやりがありませぬ。かう云ふ點を少しく考へてみなければいけませぬ。私共は小賣商人のやうに吝々した根性でなくして、鷹揚なる態度、風格を以つて臨まなければなりませぬ。卽ち今日我々は、一方には大陸的、他方には海洋的、大陸、海洋に跨がる大東亞の解放と同時に、又た建設の大事業に取掛かつてをるからには、從來の狹い島國

IMT 542

に籠居して居たところの心持ではいけませぬ。而して私共は、これを行ふには德と力とが必要であります。德と力とが一緒になつて始めて效能があるのであります。

◇力を以つて米英を擊滅

第一は、何よりも力である。この際我々が若し萬一英米と妥協するが如きことがありましたならば、東亞百年の禍根を我々は增强して、子孫に大なるところの禍を遺すことになります。そこで我々は何よりも彼等を徹底的にやりつけねばなりませぬ。東亞諸民族は英米を憎み、英米を厭ひ、英米を怨んで居りまするけれども、同時に彼等は又た英米を恐れ、英米を尊び、英米を仰いで居るのであります。日本に於いてさへも、英米依存論者があつたではありませんか。蔣介石などは今日でも尙ほ英米が最後には勝つと思うて居ります。さう云ふ場合であるから、我々が今度東亞十億の人達の眼前に於いて、アングロ・サクソン人を徹底的にやりつけて、東亞の

IMT 542

天地より彼等を放逐し去る時に於きましては、彼等も始めて日本は偉い、日本人は頼母しい、日本人を指導者とすることが、一番安全であると思ふやうになります。それで何よりも大切なことは力であります。即ちこの力を以つて、アングロ・サクソンを叩き潰して行くことであります。

◇徳を以つて東亞を綏撫

これに就いては、我が同盟のドイツ、イタリーとも相談する必要があると信ずるものであります。其の上で私が前にも申上げました通りに、徳を以つてしなければならぬ。英米人を叩きつけた其の力を以つて、英米人よりも力の弱い我が東亞の同胞を叩きつけるやうなことがあつたならば、我々は更に世界に於きまして、アングロ・サクソン以上の罪惡を犯した者になつて、天罰を蒙ることになります。それで我我は第一に全力を以つてアングロ・サクソン人を叩きつけ、又それからは全幅の仁

IMT 542

愛、全幅の徳義を以つて、彼等を引立てゝ行かねばなりませぬ。即ち我々は斯くして、始めて東亞の指導者となることが出來ると思ひます。即ち繰返して申せば、先づ力を以つて敵を撃滅し、次ぎに徳を以つて味方を綏撫すると云ふことに過ぎませぬ。

◇一命を捧げて奉公の決意

私の申上げることは甚だ簡單であつて、然も荒つぽい話でありますが、皆様が若しこれをお考へ下されば、この中に千萬無量の意味があることを御承知下さると思ひます。同時に翼くは、我が銃後の一億國民は老若男女を問はず、第一線の將兵の方々に負けぬだけの心持を以つて、永く久しく精根の有らん限りを盡して、我が天皇陛下の爲に、何時でも一命を捧ぐる決心を以つて、銘々の立場々々に於いて、御奉公をしたいものと思ひます。斯くする時に於きましては、即ち我が大日本が、

IMT 542

東亞の指導者たる使命を達することは、斷じて斷じて疑ひはないと、私は確信するものであります。

IMT 542

戰時微言

IMT 542

一億國民の義憤

一億の我が日本國民は、皆な義憤に燃えてゐる。日米會談は、公式八回、非公式二回、既に十回を累ねてゐる。然るに其の會談はず進尺退、今や我國は却て米國側から被告人の取扱を受けてゐる。

× × ×

大陸聖戰以來、足掛け五年、我軍戰へば勝ち、攻むれば取り、蔣政權は四川省の奥地に奔竄し、南京には歴然として正統なる國民政府が建設せらるゝに到つた。然るに其の事件が未だ落著せざるは、米國と英國とが、事毎に我を妨害し、我に向つて敵對行動を、薄き假面の下に、實行しつつあるが爲めだ。

× × ×

若し精嚴なる史家の筆錄を以て論ぜば、我が數百億の財を糜し、我が數百萬の兵を勞し、東亞の天地に鍋亂を永續せしめつゝあるは、眇乎たる蔣政權にあらずして、米國と英國とである。

IMT 542

誠に盜人猛けだけしと云ふ。彼の米國は自から反省するを知らず、我に向つて、逆襲し、既成の事實を無視し、現在の情勢を看過し、唯だ原則の一點張りにて、我を屈從せしめんとしつゝある。而して其の原則なるものは、只だ東亞をして米英の東亞たらしめんとするに存す。若し原則を以て論ぜん乎、我等の原則は東亞を東亞の東亞たらしめんとするものだ。此の如く彼は東亞を米英の東亞とし、我は東亞を東亞の東亞とす。我等は我が皇國の東亞の指導者たる責任を顧み、我が肇國の大義に照らし、斷々乎として我が主張を貫徹せねばならぬ。我の好意は極度まで、彼に濫用せられたり。我一歩を退けば、彼百歩を進み、我一里を讓れば、彼百里を取る。我等の義憤が、地を翻へし、天を覆すに至るも、固より當然の事のみ。

× × ×

帝國に交讓、妥協の精神は、仁到り、義盡す。然も彼は暴戾、貪慾、徒らに物質的勢力を恃み我を威壓せんと欲す。今日は決して成敗利鈍を計較するの場合でない。今日は我等一億臣民は、大御心を奉體して、義に依りて起つの日である。三千年來光輝ある、我が皇國の歴史に顧み、我等は更らにより赫々たる光輝を添へねばならぬ。（昭和十六年十二月八日山王草堂に於て）

IMT 542

大捷に處するの道

我が無敵陸軍、我が無敵海軍の世界史上無比の手柄には、豫ねて斯くある可しとは期待はしつつも、餘りの好成績に、我も人も茫然自失の情態だ。二十年一劍を磨し來りたる、猛訓練の效果は、今更らの如く顯著だ。國民は我が陸海の將兵に、感銘感謝すると同時に、今更らながら我が大御稜威の下に、皇民たるの幸運に感激する。

× × ×

斯る場合に、我等日本國民は、一層の自肅が大切だ。日本國民と云へば、此中には政府も、人民も一切を引きくるめて申すのだ。我等は對英米戰の劈頭に、彼等の出鼻を挫き、殆んど再起に困難ならしめたるも、彼等は七年戰爭、三十年戰爭、百年戰爭の歴史を持つ、極めて執拗に、且つ極めて粘り强き、曲者である。諺に英人には只だ一回の勝利がある、それは最後の一戰だとは彼等が能く口癖に語るところ。負け惜しみの文句ではあるが、また半面の眞理がある。

× × ×

IMT 542

今や禍亂は世界の隅から隅まで行き渡りてゐる。我等は西に向ふ際には、東を顧みねばならぬ。南に進むからには、北を眺めねばならぬ。東西南北、到る處に我等の緊密なる注意を必需とするもの、今日に於て最も然りとする。油斷大敵とは、今日の場合特に然りとする。

× × ×

我等は此際我が當局者が、最高度の勉强と、節約と、自省と緊肅との模範を天下に示さんことを望む。日本國民は所得の一切を、國家に獻納するをも辭しない。必要とあらば一命でも差出すを光榮とする。然も當局者は決してこの國民の獻身的精神を濫用せざらんことを勗めねばならぬ。これには何よりも先づ自から獻身的精神を發揮して、之を一般人民に標示し、國民をして、之に則り、之に倣ひ、之を學び、之を行はしめねばならぬ。

× × ×

翻つて我等國民一般に於ても、亦た戰線の將兵に對し、一點の恥づる所なく、半個の疚しき所なく、其の分限相應に於て、恒に最善の奉仕を皇國に效すを心掛けねばならぬ。大捷の惠澤は之を我が百世子孫に貽遺せねばならぬ。我等は既に我が祖先の惠澤に浴すること大且つ多し。此上更

IMT 542

もに惠澤を專らにせんとせば、天罰必らず眼前に降下せん。（昭和十七年一月十五日於大森山王亭）

大東亞戰の眞意義を沒却する勿れ

比律賓も既に全島、我が手に歸せんとし、新嘉坡も亦た最後の一擊の機に迫る。皇軍の向ふ所戰うて克たざるなく、攻めて取らざるなし。此時に於て我等は改めて大東亞戰の眞意義を、闡明せんとするも、決して無益の言ではあるまい。

× × ×

南方に於ける物資の豐富は、我等の饒舌するまでもない。從つてやがては凡有る物資が山の如く、阜の如く、我國に輸送せられ、却て其の多きに困しむほどの現象を見るであらうなど、今から樂しみとする者もあれば、また心配するものさへある。

これは閑人の妄想として、別に射利に機敏なる徒輩は、アングロ・サクソン人を追ひ拂ひ、其跡に居據りて、しこたま此方の所慾を恣にせんと目論見るものがある。所謂る彼取りて代る可しとは、彼等の根性だ。これでは全く大東亞戰の眞意義を沒却するものだ。

IMT 542

× × ×

抑も大東亞戰は、大東亞解放の戰である。我等は東亞十一億同胞の爲めに、指導者たる重責を自覺して、此の振古未曾有の大業に從事しつゝある。若し此の大旨義を打忘れ、アングロ・サクソン人の誅求、搾取を羨望し、彼等を擊退して、其の甘味を獨り專らにせんとするが如きあらば、是れ所謂る暴を以て、暴に代ふるもの。やがては各地の住民は、「憂しと見し世ぞ今は戀しき」で、却てアングロ・サクソンの舊體制を思慕するが如き情態を現出するも、未だ知る可らずだ。

× × ×

「固よりこれは極所まで押し詰めての言にして、今迄直ちに斯くある可しとは思はれぬが、兎にも角にも我等はアングロ・サクソン人の海賊的本領に倣ひ、切取强盜を專務とするが如き事は、この場合に於て、その痕跡さへも絶滅せんことを、今日より警戒せねばならぬ。」

× × ×

これは征戰に從ふ我が將兵に向つて云ふのではない。その背後から出掛け、且つ出掛けんとする人々に向つての忠告である。而して當局者も亦た能く恒に此の大東亞戰の眞意義を世界に宣明

IMT 542

して、敢てその言葉通りに實行せんことを望む。

× × ×

南方の富資は、支那の唐時代にも屢ば問題となつてゐる。唐の詩人は、其の友人の官に該方面に赴くに際し、「此鄉多二寶玉一、愼勿レ厭二清貧一」との言を贈つた。支那の詩人でさへ斯る忠告を與へてゐる。我等が此の大盛事に際し、故らに斯言を做すも、必らず之を諒とする者、天下に多からむ。（昭和十七年一月十九日於大森山王草堂）

思想戰の行衞

皇軍の向ふ所、克たざるなし。英國が東亞に於ける制覇の根據地たる新嘉坡も、今や池中の魚である。我等は南北六千キロに亙る、廣大なる戰場に於て、我が陸海の皇軍に信賴して、其の必勝、全勝に就て、何等の掛念もなければ、心配もない。

× × ×

但だ玆に一つ杞憂に勝へざるは、思想戰の行衞である。今更ら崇英拜米などと口上に宣ぶる者

IMT 542

も無ければ、自由主義、個人主義、民主主義、實利主義、物質主義、崇金主義、議會中心主義、世界主義、主權在民主義などを我は信奉し、排日本、排皇國、排國家、排皇威を我は主張し、其の身も魂も皆な敗北主義の權化なりと、自から吹聽するものは無い。

× × ×

然もこれは只だ表面だけのこと。英米アングロ・サクソンの我が國民の心理情態に及ぼせる感化は、既に百年だ。それが如何に深甚、微妙に、我が國民性に滲透し、我が國民性に反應し、我が國民性を變化せしめ來りつゝありたる乎は、知る人ぞ知る。

× × ×

然もそれは我が知識階級、有産階級、貴族、富豪、學者等の間に於て、最も甚しきものがある。彼等の中には、陽日本、陰英米にて、思想的には依然英米を以て、我が祖國となしつゝあるものがある。從つて彼等の表向きの言行には、別段指摘す可きものを見出さゞるも、その裡面に於ては、滿腔是れ英米依存でありと云ふも、酷言ではない。

× × ×

IMT 542

我等は特に文教の當局者に向つて、之を警告す。それは文教界に於ける雰圍氣が、總てとは云はぬが、依然舊體制であるからだ。世人は國民學校教師の再教育を必須とすると言ふ。然も我等は若し再教育が必須とせば、それは下級よりも中級、中級よりも上級、上級よりも最上級にありと斷言するに憚らない。

× × ×

我等は東亞が英米の暴手腕より解脱するを以て、當面の任務と信じてゐる。而してそれを完遂する爲めには、我が國民の英米の所謂るアングロ・サクソン思想より、解放せらる可きことを先務と確信する。

× × ×

我等は英米の言語、學術、文藝、其の他を排斥せよと云ふでは無い。但だ其の根本思想に至りては、絶對的に之を日本より驅逐する必要を感ずる。然ざれば物質的に彼等を征服して、靈的に彼等に征服せらるゝ禍を請來せむ。これは實に皇國の深憂、大患である。（昭和十七年二月四日於熱海清快樓内樂閑莊）

IMT 542

南と北

今や皇軍は、積水を決するが如く、圓石を轉ずるが如く、南方に向つて進出し、世界の地圖を一變し、世界の歴史は一廻轉を來しつゝあり。我が一億の人心が南へ南へと向ひつゝあるは、當然の事である。

× × ×

此の機會に於て我等が特に一言するは、北を忘るゝ勿れと云ふことだ。嘗て村田清風先生が「西北に風除けをして幕を張れ、我が日の本の櫻見る人」と詠じたる歌は、今日の我等に取りては洵に適切なる教訓である。西北と云ふ文字に、更らに東北を加ふれば、尙更ら結構である。

× × ×

從來我が國には、北守南進論が唱へられた。是は南に進むことを欲するより、寧ろ北に於て、露國の勢力と衝突するを怖るゝ人々の意見であつた。次には南守北進論が唱へられた。是は北に進むを欲するよりも、寧ろ南に於て、英米の勢力と摩擦を避けんが爲めであつた。然るに今や、

IMT 542

北にも怖るゝ所が無く、南にも憚かる所が無い。今日は何等遠慮會釋は無く、只だ我が國策の上から經綸を定めねばならぬ。それには南進は勿論であるが、同時に國民の力を北方に向つて活動せしむることを、暫くも油斷してはならぬ。

× × ×

世人は、南は我が生活線であり、北は生命線であると云ふ。然も生活線のある所に生命線があれば、生命線のある所に生活線もある。我等が其の間に區別を定むる必要は無い。只だ南に向ふは坂を下るが如く、北に向ふは坂を上るが如し。自ら難きを避けて、易きに就くは人の常情である。されば我が國策の上に於て、國民の力を北方に向くることは、特に必要と云はねばならぬ。

× × ×

古人も「攻むるの力あつて始めて守る可く、戰ふの力あつて始めて和すべし」と云ふ。今や北方の守備は鐵壁の如く儼乎として、爪も立たず、水も漏れない狀態である。然も我等はそれで安心すべきで無い。油斷大敵と云ふ言葉は、此所に大なる效目がある。（昭和十七年二月二十日於熱海精快樓内樂園莊）

IMT 542

新嘉坡の陷落

新嘉坡の陷落は、我が皇軍の絶代の偉勳であるばかりでなく、實に東亞興隆の一大徵象として世界史上に特筆せらる可き一大快活事件である。同時に百有餘年、東亞に龍蟠虎踞したるアングロ・サクソン覇圖の凋落、衰亡を徵象する、彼等に取りては、哀悼の一大墓碑である。

× × ×

新嘉坡は眇たる一孤島だ。然も其の形勝を占め、一面印度洋を控へ、一面太平洋を控へ、更に他の一面は南支那海を控へてゐる。歐亞の關門、米、濠、印の通路。正に是れ蛟龍顎下の珠玉にあらずんば、猛虎額上の眼睛だ。一八一九年海賊の血沸騰したるアングロ・サクソンの放浪兒ラッフルが、之を掠取したるは、流石に烱眼と云はねばならぬ。

× × ×

爾來一百二十三年—香港占領よりも二十三年以前—アングロ・サクソンは之に據りて、其の東亞制覇の要地とした。然も彼が之を以て一大海軍根據地となし、一大鐵城となし、一大要塞化し

IMT 542

たるは、近來三十年に滿たず。而して彼が之が爲めに無慮八億圓に値ひするの費用を惜まず、之を此の如く造作したるは、畢竟日本の進出を控制せんが爲めであつた。

× × ×

アングロ・サクソンにも、尙ほ一片の良心は殘存してゐる。彼等が日英同盟を裏切り、日本の首を手土産に、米國に叩頭したる以來、何時かは日本人が來らんかと、其の恐怖心が主因となりて、此の如く形勝の地に、此の如き一大要塞は出で來つた。果然日本は來た。而して日本は之を陷落せしめた。

× × ×

顧ふに彼等は海面に備へて、陸面に備へず。その陸面も南面に備へて、北面に備へず。而して我軍は陸、海、空の三軍同心協力、其の備へなき陸上の東、西、中央の三道より併進し、一千二百粁の殆んど人間の行く可らざる險路、難路を五十五日間に突進して、新嘉坡の向岸に達し、遂に五日間の準備を以て、直ちに二月九日午前零時には、ジョホール水道を渡つて、新嘉坡の上陸に成功した。

IMT 542

× × ×

是れ一に敵の意表に出でたるものにして、固より世界列國の驚異に値する所以。我等は我が皇軍—陸、海、空—が三位一體となりて、互ひに相ひ呼應し、手の臂を使ふが如く、互ひに相ひ戮協し、此の如き偉大なる成功を遂げたるを祝福す。

× × ×

然も敵の不意に出づるは、只だ我が皇軍にして始めて之を成就するを得る。何となれば皇軍の眼中には、不能の二字なきが爲めだ。道無きも皇軍は行く。輜重、糧食なきも皇軍は生活す。武器に不足するも、皇軍は善く闘ふ。皇軍の前には、何物も遮るものなし。是れ一に　大元帥陛下の御稜威の下に、我が將兵が、決死報效の誠を致すが爲めだ。

× × ×

記者は此の大快報を聞いて歌うて曰く、

長江天塹控三洋。　歐亞關門作鐵城。
轟轟震空坤軸裂。　日東男子是神兵。

IMT 542

又歌うて曰く、

陷二落星城一絶代功。　老獅覇業半成レ空。

日東男子有二雄志一。　更駕南溟萬里風。

記憶せよ「既に」ではない「半ば」である。戰爭は前途尙ほ遠し。我等銃後國民は、一層の努力を以て、第一線の將兵の勞と勳とに酬い、且つ之を奬勵す可き大なる責任を自覺せねばならぬ。

國語第一

國旗の向ふ所、貿易之に隨ふと云ふが、共れよりも大切なるは、國語である。國語は實に文化的武器にして、苟くも文化を普及せしむるには、最も缺く可からざる必須の用具である。

× × ×

スエズ以東、アングロ・サクソンの覇風を遏しくしたる地方は、悉くとは云はぬが、概ね英語が主要語となつてゐる。皇軍の向ひたる所、香港、比律賓、新嘉坡より、所謂る海峽植民地は、概ね英語が公式の國語として通用せられてゐる。

IMT 542

× × ×

されば既に武力に於てアングロ・サクソンの勢力を一掃したる上は、文化の上に於て又た是を一掃す可き必要がある。それには何よりも、日本語を以て英語に換ふる工作を第一とせねばならぬ。若し萬一、英語が便宜なりとて、其のまゝ是を襲用し、若くは使用せしむるに於ては、折角武力的に討掃したるアングロ・サクソンの勢力が、文化的に存續し、若くは盛り返し來つて、遂ては元の木阿彌とならむも未だ知る可からずだ。

× × ×

我等は臺灣の領有以來四十七年、朝鮮を併合して以來三十二年、而して何れも我が國語の普及が、頗る遲々たるの狀態を遺憾とする。之は當初に於て、我が國是徹底せず、その爲めに當局者の怠慢、若くは不熱心の結果であると云ふも、過言であるまい。然も今日は日本が自ら東亞の指導者を以て任ずるばかりではなく、我が同盟國に於ても之を以て我に許し、我が東亞の諸民族も之を我に望んでゐる。されば今日に於て、何の遠慮も無く、何の會釋も無く、速に徹底的に、日本語の普及を計り、苟くも當座は多少の不便あるも、是を公語として、今日より之を使用し、且

IMT 542

つ使用せしむることを専要と信ずる。

× × ×

嘗て壬辰の役、人あり豊臣秀吉に向つて、通譯者を携帯せしめむことを談じたるに、秀吉笑つて曰く、日本軍の向ふ所、日本語を以て可なり、何ぞ通譯者を要せんやと。浅く之を解せば、如何にも一時の大言壯語に似たるも、深く之を解すれば、定に意義ある言葉と云はねばならぬ。今日に於て尚ほ未だアングロ・サクソン依存の夢醒めず、英語を第一語とせむとする者に向つて、斯る相談をするは無用の極みであるが、然も今日の當局者は、深く此所に想ひ當る所があるであらう。（昭和十七年三月三日於熱海清快樓内樂園莊）

潤ひある政治

東條首相の地方長官に向つて、潤ひある政治が大切だとの訓示は、我等尤も同感だ。同時に此の機會に於て、その潤ひは如何にして生ず可きかを一言したい。

× × ×

IMT 542

正直のところ今日は、役所と云はず、市場と云はず、何れへ向つても、人心が何となく荒みつつある。何處を向いても、目の玉のみが光りて、春風駘蕩などと云ふ光景は、めつたに見出されない。所謂る室に怒り、市に色すと云ふ言葉が、其儘通用してゐる。

× × ×

我等は決して官吏のみを責めんとする者ではない。されど官吏は其の位置の高下に論なく、天下の政治を施行する任務の一部を擔當する者だ。されば彼等は須らく自重して、親切心を蓄へ、養ひ、且つ發揮せねばならぬ。潤ひある政治は、只だ親切心から出で來る。

× × ×

古人も民を視ること傷めるが如しと云うた。地方官は勿論、人民に接する各官廳、大小の官吏は、此の親切心が大切だ。親切心があれば、四角な法規も、圓く施行が出來る。親切心が無ければ、圓い法規も、四角に施行せられ、或は全く行止りとなる。我等は今日の法規が、勵もすれば死法となり、徒律となりつゝあるを、只だ其の親切心無きが爲めであると信ずる。

× × ×

IMT 542

今日各方面に演繹沙汰の行はれつゝある評判は、我等が尤も痛嘆する所。東條首相の清廉、潔白、風標、孤高の人格は、天下の具に瞻るところ。我等は今日に於て官界を刷新し、吏道を一洗するの好時機であるを疑はない。

× × ×

尙ほ一言するは、繁文縟禮と、責任回避との流弊だ。この二者は互ひに因となり、果となり、以て官界を腐敗せしめ、以て人民を苦悶せしむ。佛國の衰亡の如きも、其の一は何れの官吏も皆な責任を回避し、回避する爲めに、何人も責任を執る者なく、文書の持ち廻りにて、日が暮れたる爲めと聞く。

× × ×

改めて云ふ。我等は決して單に官吏のみに向つて、其の註文を附けんとするものではない。されど官吏は實に其の位置の高下に拘らず、皇國大小の政務に任ずる者。今日國運隆興の際、吏道の隆興は其の第一義と云はねばならぬ。故に敢て此言を做す。希くは斯心を諒とせよ。（昭和十七年三月初六）

IMT 542

皇國女德の長養

今更ら事珍らしく、皇國と英、米、蘭佛國との勝敗の原因に就き、講釋する必要は無い。只だ特に見逃し難き一事がある。それは皇國女性の力である。我等は此隠れたる大いなる力に感謝せねばならぬ。同時に如何に此力を今後培養し、扶殖し、增大せしむ可きかに就て、考慮せねばならぬ。

× × ×

近くは眞珠灣九軍神に就て見るも、彼等は何れも、健全なる家庭の子にして、其の家庭は、實に健全なる女性の力に由つて保持せられつゝある事が分明だ。昔は希臘スパルタの母は、其の子の出陣に際し、汝の劍短かければ、更らに一歩を進んで敵に當れと云うた。又た汝の楯を突いて進め、然らざれば屍を其の楯の上に横へて歸れと云うた。是が日本の女性の總ての心である。而して更らにそれよりも大なるは、女性自からが難に際し、危きに臨んでは、其の身を第一に犧牲とする事だ。是は日本武尊に於ける弟橘媛より、近くは戊辰會津戰爭に於ける中野タケ子等の例

IMT 542

に見れば分明である。

× × ×

現在のアングロ・サクソンには父母も無く、子供も無い。只だ夫婦兩人が、互ひに享樂の對象として持ち合つてゐる。されば艦隊が遠洋航海するや、士官の妻は豫め先廻りをなし、其の艦隊の碇泊する場所に待ち受けて、以て頃刻の歡を盡さむとしつゝある。之を我が萬葉集に見る防人の妻が、幾歳も衣帶を解かず、其の夫の歸來を待つ者と比すれば、實に天地の懸隔がある。固よりアングロ・サクソンとても、除外例が無いではない。然も大體の雰圍氣が、此通りであるとすれば、陸海將兵が當初より鬪志乏きは勿論だ。軍職も亦た享樂の對象たる一の方便に過ぎない。而して斯くあらしむるは、實にアングロ・サクソンの女性の不可思議力による。

× × ×

我國も明治末期より大正に懸け、米國女性の享樂主義を模範とし、産兒制限等を誇り氣に唱へ、獻身的精神等は、何時の間にか、皇國の女性より取り去られんとしつゝあつたが、勢ひ極まれば變じ、今日は復た皇國本來の女性に立ち還りつゝあるは、大に意を强うするに足る。但だ此

IMT 542

上は、我が文數の當局者が、能く國家興廢存亡の由つて存する所は、女性の力如何にあるを知り、良く之を指導して、今後の一大變局に善處せんことを祈つて止まない。（昭和十七年三月十九日於熱海清快樓内樂園莊）

軍機と政機

自主的外交とは、孤立外交を意味するものではない。固より獨善外交、利己外交ではない。但だ一國自主の立場よりして、其の外交の國是を定むるがそれである。その意味に於て、樞軸外交は、當今我が皇國外交の根本方針である。我等が獨逸、伊太利その他の諸國と世界新秩序創建の爲めに乘り出したるは、一時の方便でもなければ、當座の都合でもない。眞に互ひに相ひ許し、相ひ知り、相ひ嘆美して、偕に俱に其の國家としての天職を達成せんが爲めである。

× × ×

凡そ軍機と政機とは、互ひに表裏を爲し、互ひに追隨するもの。今や皇國の軍機は、南征に於て、振古未曾有の大快捷を齎らし、敵をして失神、氣死せしめ、與國をして驚喜、快嘆せしめつ

IMT 542

うある。此時に際して政機の活潑に蠢動す可きは、當然の事だ。我等は今日に於て、更らに新たに我が同盟國たる獨逸、伊太利その他と、從來に倍し、一層緊密なる商量を遂げ、世界新秩序の建立の爲めに、百尺竿頭一歩を轉ずるの必要を認む。

× × ×

今や北歐は雪天氷地より離脱し、漸く春風吹き渡らんとするの候を兆しつゝある。正に是れ戰機漸く動かんとする刹那だ。我が與國獨逸が最近數個月、堅を持し、鋭を蓄へたる效果が、方さに其の全貌を露呈せんとするの起頭に際す。我等は深き深き關心をもつて之を眺め、且つ其の好首尾を期待してゐる。而して獨逸が我等の期待以上に出づ可きは、我等の固く確信する所だ。同時に伊太利の運動も、地中海方面より阿弗利加にかけて活潑なる可きは勿論だ。

× × ×

獨逸の印度洋に出でんとする志望は、第十九世紀の末期より傳統的である。所謂る三B鐵道はその志望表現の一端だ。伊太利は羅馬帝國以來地中海の女王であつた。然るに何時の間にやら英人の爲めに占有せられ、所謂る臥榻の側他人の鼾睡を容れ來つた。その速かに之を一掃す可きは

IMT 542

必然の勢だ。

× × ×

伊太利の勢力はスエズ運河より南下し、獨逸の勢力は黑海を超えて南下し、日、獨、伊三國の力は、英國の勢力を印度及び印度洋より一掃するに餘りある。但だ印度は印度人の印度にして、印度その者の向背が先決問題だ。凡そ三億五千萬の印度人が、十萬に足らざる英人に支配せられ、僕々爾として、其の脚下に叩頭するほど、奇怪なる現象は、世界未曾有の事だ。我等は今日に於て印度人が獨立せずんば、終古獨立の機會なきを疑はない。（昭和十七年三月二十四日）

猛斷威決

國旗の向ふ所、政治之に從ふ。我等は軍務に於て、世界第一の優秀者であるを、實物教育もて世界に宣明した。此上は政務に於ても亦た同樣たる可きを、宣明せねばならぬ。而してこれは決して容易の業ではない。

× × ×

IMT 542

従來日本人は、餘りに親切心が過甚にして、己が欲する所を、他に押賣するの癖がある。故にその結果は、動もすれば好意の逆政を來たすことがあるとは、曾て我等が聞くところ。これも一應尤もの意見だ。けれども同時に日本人は餘りに他の感情を尊酌し過ぎて、動もすれば他をして我が寛大に狃れしめ、我が仁慈に甘えしめ、やがては我が好意を濫用して、增長、我慢、以て我を輕侮するに到らしむることも、亦た一の大なる缺點と云はねばならぬ。

× × ×

從來我が征戰五年間に於て、戰績の擧りたるに比例して、政績の擧らなかつた原因には、種々の事情あるも、要は餘りに所謂る宋襄の仁の致すところだ。支那各地に於ける租界の處分の如き、今少しどし〳〵我が思ふ樣にやりつけたらんには、必らず大なる效果を擧ぐべきであつた。然もそれは過去の事。我等の問題は、過去の批評ではない。現在及び將來の經綸だ。

× × ×

手近く云へば、我が二十萬の捕虜を如何に措置す可き乎。南方に散在しつゝある抗日華僑を、如何に處分す可き乎。それ等に就ても、宜しく大いに我が實力の徹底を努めねばならぬ。華僑の

IMT 542

如きは、飯上の蠅の如く、その表面は我が軍威に恐縮して叩頭するも、彼等はやがては如何なる惡計、陰謀を逞しくする乎、未だ知る可からずだ。

× × ×

占領地域の政治は、秩序の恢復を第一とせねばならぬ。それには我が皇威を徹底的に、其の在住人民に感戴せしめねばならぬ。徒らに一時を糊塗する、偷安的、姑息的の妥協手段は、百害あり て一利無し。

× × ×

從來東亞に於けるアングロ・サクソンが、其の優越權を振り廻はしたる多年。その爲めに東亞諸民族は、殆んど腹の底までしみ渡り、アングロ・サクソン人を見ること、宛も鬼神を見るが如しだ。されば何よりも東亞新秩序の建設には、此の迷信を打破することを、先務とせねばならぬ。それには宜猛參濟は勿論として、先づ猛斷、威決を以て、アングロ・サクソンの遺類を根柢より一掃し去らねばならぬ。此の如くして始めて八紘爲宇の皇謨は、其の眞面目を露現することが出來る。（昭和十七年三月二十七日）

IMT 542

皇室中心と民族中心

我が皇國日本は、皇室中心の國體にして、民族中心の國體ではない。苟も日本臣民にして、皇室に忠貞を效す者は、やがては日本民族の中に包容せらる。是れ三千年來、歴史の證明するところだ。

× ×

民族中心の國家に於ては、異民族に對して、當然差別待遇を加へ、民族相互間の摩擦は勢ひ免れない。然も皇室中心の國家に於ては、皇室の恩德は太陽の如く、その廣大無邊の光と熱とは、一切の衆生を渾和、融合して、一體ならしむ。我が大和民族が、世界に冠たる優秀民族たる所以の一は、實に此の一大作用に歸するものだ。

× ×

日本の上代に於て、已に皇別、神別、蕃別の姓氏が分類せられた。然も今日に於て、何人がその三者の一たる乎。殆んど問題となる者はない。乃ちこの三別に屬する各個が、何れも日本臣民

IMT 542

たる以外に、何等の差別が無き所以を知る。

× ×

副島種臣先生は、維新長老中の尤も尊皇家の一であつた。然も先生は自から漢の劉邦の裔と稱し、劉氏を名乗つた。高本紫溟先生は、鎖西の碩學にして、高山彦九郎の親友であり、九州に於ける勤皇唱首の魁であつた。然も其の祖先は半島人にして、自から李順と稱した。乃ち朝鮮李氏の裔であつた。

× ×

以上は手近き例を擧げたるに過ぎない。されど我等は所謂る我が大和民族が、皇室の恩德によりて渾成せらるゝ所以を知るに於て餘りあらむ。

過去此の如くなれば、百世と雖も知る可きだ。我が大和民族の前途は、實に洋々として海の如きものを見る。

× ×

斯く云へばとて、我等は現在の大和民族に向つて、無我夢中に雜婚を奬勵せよと云ふではな

IMT 542

い。民族的矜持を放擲せよと云ふではない。但だ我が民族成立の由來に遡りて、我が日本は皇室中心の國體たるを詳かにし、之を以て異民族統治の國是を定む可しと云ふのだ。

× × ×

所謂る皇道政治は、皇室中心の政治である。我等は即今我が新領土の政治に膺る人士が、此の國體の淵源を昭らかにし、其の任地の住民に向つて、我が天皇の現世神で在すことを熟知せしめ、皇室に對する尊崇と忠誠との心を養成せしむるを、先務とせんことを望む。（昭和十七年四月一日）

獨立乎、隷從乎

若し大東亞に於ける三大民族の特長を擧げん乎、印度人は能く考へ、支那人は能く語り、日本人は能く行ふ。日本人は哲學に於て印度人に及ばず、文學に於て支那人に及ばず。但だ印度人の考へたる所、支那人の語りたる所を、能く行ふの一事は、日本人の得意とする所。それが即今東亞新秩序建設の實行者として、日本人が第一歩を踏み出しつゝある所以。

IMT 542

× ×

印度各派の首領達は、今や英國のクリップスと談判最中だ。クリップスが、印度に乗り込み來つた目的は、兎も角も印度人を以て、アングロ・サクソンの沒落を濟ふ矛となし、楯となし、樞軸側に對して、第一線に立たしめんとすることは、今更ら詮議する迄もない。

× × ×

されば問題は單簡である。印度は印度人の印度とする乎。英米人の印度とする乎。若し前者ならば、只だ速かに一切の談判や、交渉を打切る可しだ。若し後者とすれば、如何なる談判でも、又たそれが一年かゝつても、御勝手次第だ。

× × ×

英人の不信不義は、世界に隱れなき事實だ。印度の志士ボース氏が、伯林より放送したる通り、第一次世界大戰に於て、印度は英國の空手形を妄信し、その爲めに血と、骨と、汗と、膏とを、惜氣もなく提供した。而して戰後の所得は、只だ英人の不信不義の露堂々のみだ。虎や狼でも、一同一の陷穽には罹らない。然るに世界中尤も賢明なる印度人が、今更ら懲り性もなく、英人の手

IMT 542

練手管に纏らんとするは、餘りにも笑止千萬ではない乎。

× × ×

クリップスが、如何なる妥協案を持ち出すも、其の目的は唯一だ。三億五千萬の印度人を以てアングロ・サクソンの沒落を喰ひ止めんとする土饅たらしめんとするに過ぎない。如何に印度各派の首領達が、會談の席上に決定的勝利を占めたりとて、それは一片の空紙である。

× × ×

英人の印度に虐政を施きたる事實は、第十八世紀の末に、英人バークの議會に於けるヘスチング彈劾の演說が之を雄辯に語りてゐる。第十九世紀の中期には、英人マコーレー卿が痛快に之を指摘してゐる。而して更らに第十九世紀の末期には、ヴイクトリア女皇が、親しく戒飭してゐる。今更ら第三者たる我國が喙を挿む必要はない。我等は印度人の辛拘力の過大なるに驚嘆する。

× × ×

但だ英人は巧みに「分離せしめて支配せよ」の原則を應用し、之を立體的には階級的の差別、

IMT 542

之を水平的には各宗派の異同、其の他其の中間には各王侯國を保持し、各人各國相ひ爭はしめて、自から手を拱して之を支配す。其の老獪や亦た極れりと云ふ可し。斯る現狀を前にして、印度の各首領達は、何時迄斷然たる獨立を遲疑する乎。（昭和十七年四月六日）

教育者の教育

我が皇軍の南進、特に即今印度洋に於ける進攻の大發展を見るにつけても、やがては次に來る可き、我が皇民の教育を痛感する。

× × ×

次代の日本國民は、其の責任に於ても、其の業務に於ても、現代の我等に十倍乃至百倍するものがある。我等は只だ今日の事を、今日の我等にて辨ずるばかりでなく、次代の事をも考慮せねばならぬ。それを考慮するにつけても、その人物の教育を考慮せねばならぬ。

× × ×

教育は師道より始まる。而して今日の教育者は果して人の師たる自覺ある乎、自信ある乎、自

IMT 542

恃ある乎。我等の眼中には、今日の好教育家と稱せらるゝ者は、寧ろ概ね教育事務家である。即ち教育業務の擔當員としては、申分なきも、それは校務を整理すると乎、上司に受けが善いと乎、環境と圓滑であると乎、云はゞ帳面通りの教育者であり、卓上据付けの教育者である。

× × ×

眞の教育家には熱情があらねばならぬ。感激性があらねばならぬ。教師も人である。生徒も人である。人が人を教育するには、只だその人間味が尤も大切だ。今日の如く教師は學問を切賣りし、生徒は學問を切買ひす。それでは人性の陶冶、人物の鍛錬などは、とても思ひも寄らぬ事だ。

× × ×

我等は決して科學を輕視する者ではない。されど最後の問題は、知識ではない。知識の運用である。知識の運用は、只だ其の運用者の一心に存する。その一心に存する所を看取して、之を存養する所に、始めて教育の本色がある。

× × ×

IMT 542

大東亞戰爭は、我が國民の教育に向つて、多大の教訓と、示唆と、諷諭とを寄與しつゝある。器械も大切だ。然もより大切なるは、その器械を驅使するの人だ。その人の教育は、決して空々寂々の理窟一片で出來るものでは無い。

× × ×

我等は今日に於て、何よりも先づ教育者を教育するを先務と信ずる。それには活ける生徒を、物件視するが如き教師をして、跡を教育界より絶たしめ、眞劍に、眞面目に、熱情と、感激性とを以て、自から國家の爲めに、將來國民の育成に、全心全力を獻ぐる者を教養せねばならぬ。

（昭和十七年四月十日）

印度は今が起つ可き時

英國の奸謀は、印度三億五千萬——或は四億とも云ふ——の民衆を驅りて、一方に於ては我が皇國の大東亞に於ける活動を遮斷せんとし、他方に於ては我が興國たる獨逸、伊太利の地中海、阿弗利加及び東南歐に於ける活動を沮止せんとするにある。その爲めにクリップスは、印度人に

IMT 542

啗はしむるに十分とする香餌を懐中にして來た。

× × ×

然るにそれが正面よりガンヂーに彈ねつけられ、更らに國民會議派の領袖ネールよりは、其の反對決議案を突き付けられ、回教聯盟よりも反對せられ、其の他各派の面々よりは、苦情や、難題が續出し、折角米國大統領の特使ジョンソンや、印度防衛軍の主將ウェーヴェルなどの中間斡旋も、其の效果なく、遂ひに一片の恫喝的捨臺詞を置土産に、歸英するの已むなきに至つた。

× × ×

大英帝國の潰崩は、英人自身さへも知つてゐる。それを知らぬは、只だ重慶の一角に殘喘を保つてゐる蔣介石以外には、一人もあるまい。然るに印度四億の人々は、それに氣附かないの乎。それとも何か英國に對して未練があるの乎。

× × ×

前回の世界大戰には、印度は英國の爲めに一百萬の軍兵を提供し、十餘萬人を犧牲とした。その以外に搾取、誅求せられたる資材、物件は、とても統計には上らぬ程であつた。而して其の結

IMT 542

果は、虐殺、騙詐、饑饉、餓死に過ぎなかつた。彼等は何時迄其の惡夢より醒め來らざる乎。

× × ×

印度の常習病は、內輪喧嘩と、議論倒れとの二者である。若し印度教徒も、回教徒も相ひ協力し、王侯國も、其の他の地方も相ひ一致し、四億の人民が、十萬に足らざる英人に向つて、其の歸國を促さば、問題は立派に解決す可き筈だ。印度の對英問題は、議論ではない、實行である。妥協ではない、絕緣である。

× × ×

若し印度の民衆が、此の一大好機を逸し去り、英國と存亡を偕にせば、彼等は看す〳〵大英帝國火葬場の新材たる御用を勤むるの他はあるまい。我等は飽迄印度の獨立を希望し、若し眞に印度に其の志望あらば、之を達成せしむるに於て、餘力を愛しまざるもの。然も何よりも先決問題は、英國との絕緣であらねばならぬ。（昭和十七年四月十四日）

米國の迷夢覺醒の機

IMT 542

世界無二の堅塞と恃みたるバタアン半島も、四月三日—神武天皇祭日—總攻撃開始以來、我が忠勇無敵の神兵の爲めに、旬日にして完全に攻略せられた。而して今や只だコレヒドール島の一角に殘喘を保つのみだ。それも其の運命は、旦夕に極つてゐる。

× ×

若しルーズヴェルト大統領に一片の常識あらば、これにて彼が世界制覇の迷夢は、直ちに醒む可き筈だ。今日の米國は實に興廢、存亡の岐路に立つてゐる。若し今日に於て、世界の各方面に餌の如く差し出したる手を引き込め、國祖ワシントンの遺言通りに、北米の大陸に安著せば、尙ほ世界の一國として存在するの幸運を攫むことが出來る。然らざれば北米合衆國の前途は、實に危險千萬だ。如何なる大膽なる保險屋でも、誰もそれを保險する者はあるまい。

× ×

ルーズヴェルトは、デモクラシー諸國の總元締を以て自から任じ、米國を擧げて其の仲間諸國の造兵廠たらしむると豪言した。然も其の仲間たる蔣介石は如何。英國は如何。米國は蘇聯にさへも頻りに色目を使ひつゝあるが、今は一臺の飛行機さへも、之を輸送するに困難を感じつゝあ

IMT 542

るではない乎。

× ×

米國が好むにせよ、好まざるにせよ、東亞からは全然放逐せらるゝの他はあるまい。英國は米國に向つて、一兵士の加勢も、一戰車の應援も出來ない。濠洲は只だ米國に向つて悲鳴を揚げつつあるまでだ。所謂るデモクラシー諸邦は、今や秋の木葉の散る如く、日一日と散りつゝある。而して米國の最後の切札であつた佛國も、今やラヴアル氏が復活し、其の政權の主宰者となりたれば、佛國の態度は、いよいよ鮮明となり、歐洲中原に於ては、事實の上に、近く獨佛提携の活動を見る可きは、之を推定するに難くない。

× ×

日本は決して其の進攻の氣勢を、半途に中止するものではない。獨逸の春期攻勢は、今やその準備が略ぼ成りつゝある。伊國の活動も、半ば開始せられた。我が樞軸國の活動は、此れよりして一層活潑且つ緊切なる可きは、やがて事實が之を語るであらう。我等は米國が此の機會に於て速かに其の覺醒せんことを望む。然らざれば彼はいよいよ其の墓穴を掘らねばならぬ。(昭和十七

IMT 542

年四月十七日）

平和の戰爭

我等の興國獨逸に向つて、我等が感心と云はんよりは、寧ろ敬服するは、戰爭は勿論だが、それよりも戰後の經營だ。寸地を取れば、其の寸を保ち、尺地を得れば、其の尺を利す。砲聲の熄むと同時に、行政の機關は、直ちに動き出す。

× × ×

古は諸葛孔明、曾て屯田持久の策を建てた。今や我が皇軍は、向ふ所敵無く、戰うて克たざる無く、攻めて取らざる無く、其の戰鬪の秀傑に就ては、過日の獨逸觀戰武官の放送したる通りだ。これは決して過當の言ではない。但だ有の儘の事を、有の儘に語りたるまでだ。

× × ×

但だ此際我等が熱心努力す可きは、戰後の經營だ。云ひ換ふれば平和の戰爭だ。此の一事に於ては、我等には我等の興國獨逸人よりも、倍加の困難が降つて來る。そは我が東亞の隨處に於て

IMT 542

アングロ・サクソン人崇拜の陋習が、牢乎として拔く可らざる根を下し、株を張りてゐることだ。それはフイリツピンでもマレーでも蘭印諸島でも、ビルマでも、凡有る方面にかて、其の程度の濃淡、厚薄はあるが、皆な然りと云はねばならぬ。

× × ×

彼等は自から卑しめ、英米人を崇拜しつゝある。されば如何に日本人が戰勝したりとて、それは概ね一時的の事と思うてゐる。故に彼等は東洋流義の所謂る面從腹非で、如何に卽今我が皇軍を歡迎したとて、それが彼等の我が皇威に信服した證據とは、猝かに斷定し難きものがある。

× × ×

獨逸人の占領地に於ける、只だ秩序と安寧とを保持し、利用厚生の措置を施せば足る。然るに我等はその以外に、その以上に、彼等を思想的に信服せしむるの道を講ぜねばならぬ。云はゞ平和の戰爭は思想の戰爭である。

× × ×

兎角日本人は、己を以て他を度る癖がある。同じく東亞の民族でも、銘々特殊の性格がある。」

IMT 542

それを日本人同様、無差別に一視するは、大なる間違ひだ。經濟上の施設も必要だ。富源の恢復若しくは開拓も急務だ。然も同時に精神的に東亞民族の自覺心を喚起し、彼等が何時迄も英米人の隷屬たるを甘んぜざる精神を振起せしめ、而して我が皇化を東亞の全面に光被せしむることは今後に於て最も急務とせねばならぬ。（昭和十七年五月十六日）

招かざるの客

昭和十七年四月十八日、和風麗日、花謝し葉茂らんとする一年の好時節。正午を過ぐる間もなく、手を出せば屆かんばかりの、青丸に白星を點じたる敵機は露はれ、病院や、學校、その他の人家に若干の爆撃を行ひ、我が空軍の追撃に、雲か霞かと逃げ失せた。

× ×

本文の記者は、餘儀なき用事の爲めに、その最中に東京市の南部より中央部に赴いた。而して途上何れも市民諸君が甲斐々々しく支度し、それぞれ防備の位置に就いてゐた。何れも意氣昂揚

IMT 542

して、何等恐怖の色もなく、倉皇の狀もない。中には天空を凝視して、嬉々として花火でも見物するかの如く、相ひ語りつゝあるを見て、實に其の態度の良好なるに感謝した。

× ×

この不時の客は、名古屋をも神戸をも見舞つたが、一切要領を得ずして逃走した。開戰以來一百三十日。開戰の當初は、毎日期待してゐたが、今日では最早容易に來らぬものと諦めて居た。然るに不時に來訪した。イザ御座れと折角の馳走を喫せしめた。九機墜落がそれである。若し再度來らば、更らに十二分の馳走が準備してある。

× ×

不時の來客の爲めに、我等は防空演習の實演が出來た。然も其の費用は向ふ持であつた。同時に我等が餘りに我が皇軍の赫灼たる快捷、奇捷、大捷に炫惑せられて、看脚下を忽にせんとする場合に、一大警策となつた。更らに此の實演實習によりて、我等に幾許の示唆と教訓とを與へた。

× ×

IMT 542

或者は倫敦市民が、爆彈の雨下、爆音の雷轟の裡に生息して、泰然自若たるを讃稱し、我等に向つて說教せんとするが如き口吻を洩らすが、それは餘りにも我が日本國民を侮辱する者だ。我等は近く親しく我が東京市民各位の態度を見て、とれ以上の良好なる者を見ずと思ふ。我等は決して倫敦市民を手本とする必要は無い。倫敦市民の眞似する必要を認めない。況んや旭日昇天の皇國は、日沒入海の英國と同一視す可きものでは無い。

× × ×

我等は寧ろ我が銃後の國民が、積極的に、自發的に、身を挺し、互ひに相ひ協力し、國土治安の重責を全うせんことを祈りて止まない。而して我が軍務の當局者が能く此の國民の忠勇無比なる赤心と、其の節度剛毅の態度とに共調して、軍民一致、即今乘り出しつゝある大東亞新秩序を完成せんことを望む。油斷大敵、戰勝者に於て、最も然りとする。（昭和十七年四月十九日）

教育三重點

教育の要は、多端なるも、其の重點は、先づ三を擧ぐ。己を知る。國を知る。土を知る。己を

IMT 542

愛す。國を愛す。土を愛す。

× × ×

『己を知れ』とはソクラテス以來殆んど總ての哲人の訓ふるところ。孟子は『學問の道他なし、其の放心を求むるのみ』と云うてゐる。己を知る、故に己を愛す。己を知るとは、煎じ詰めて云へば、己を愛することを知ることである。國を知ることも亦た然り。我等は我が國體の世界古今に通じて、絶對無比なるを知る。是を以て、我等は我が國に向つて、絶對無比の愛を獻ぐる。愛國の源は知國である。

× × ×

人は如何なる場合でも、土を離る可きものではない。人は土から生れ、土に成長し、土に還る。一萬米の天空を翔る飛行機も、土より發し、土に歸る。或は航空母艦ありと云ふも、その航空母艦さへも湊より發し、湊へ著す。乃ち千仞の海中を潛る潛水艦も亦た然りとす。空軍でも、海軍でも、到底土と離るゝことは出來ない。又土を離れては出來ない。

× × ×

IMT 542

土を知れば土に親む。土に親めば土を愛す。如何なる國家でも、其の基礎は農に措かねばならぬ。農は國の基とは、決して農業者に偏私したる文句ではない。孔子は『繪の事は素より後にす』と云うた。一切の職業は農を基本としての職業だ。工業でも、商業でも、其の他凡有る職業皆然りとする。

× × ×

羅馬の興隆せんとするや、其の大將シンシンナタスの如き、軍務終るや、鍬を乗つて田園に耕し、軍務起るや、鍬を抛つて戰陣に立つた。乃ち我が西郷南洲が、自から吉野村に開墾に從事したるが如き、蓋し深く慮るところありての事だ。看よ眞珠灣頭の九軍神の如き、或は上州の赤城山下より、或は薩南の片田舍より出で來りたるではない乎。

× × ×

土から遊離したる國民にして、古に滅びたるは羅馬帝國だ。今日に滅びんとしつゝあるは、英國だ。我等は我國の教育が、曾て已から遊離し、國から遊離し、土から遊離せんとしつゝあるを見て、寒心に勝へなかつた。今や漸く其の弊を覺り、個人の品性を錬成し、忠君愛國の志趣を長養

IMT 542

せんとしつゝある。希くは更らに土を知り、土に親しみ、土を愛することを敎へよ。卽ち幼稚園より大學に至るまで、此の旨義を一貫せしめよ。國土擴大の今日、これが最も急務である。（昭和十七年五月十一日）

土に親しましめよ

或る同盟國の一記者は予に問うて曰く、現時に於ける日本の武勇は、眞に天下無敵である。然も今や日本は、世界の最も富饒なる方面に其の力を伸し來つた。されば軈ては、日本も亦た羅馬帝國の覆轍を履む心配は無き乎と。

× × ×

予曰く、斷じて無し。苟くも日本臣民が、皇室中心を忘れざる限りは、日本が世界の富の牛を占有したりとて、決して其の富の爲めに煩はさるゝ心配は無い。何故なれば、日本の富は個人の富で無く、國家の富である。日本臣民は其の生命さへも、大元帥陛下の御旗の下に捧ぐるを光榮とする。況んや富に於てをやだ。

IMT 542

×　　×　　×

諺に取らぬ狸の皮算用と云ふ。我等は未だ南方の物資を、享有する迄に運んでゐない。今日に於て斯かる心配をなすは、餘りに氣が早過ぎる樣である。然し我等はこの外國記者のことに就て深く反省する必要がある。苟くも國民の精神が質實剛健なるに於ては、其の一身を黃金の中に埋めても、決して富の爲めに煩はさるゝ所は無い。されば我等は、富を得て文弱になる事を心配するよりも、寧ろそれを得ても遊支へ無いだけの、我が日本精神の鍛錬を必要とせねばならぬ。

×　　×　　×

其れに就て何よりも大切なるは、土に親しましむるの教育である。平たく云へば、一億國民の總てを、原則として、農的氣分を持たしむることである。

×　　×　　×

羅馬兵の向ふ所前無かつたのは、其の市民が土に親しんだからである。それが驕ては富に陶酔し、土を離れ、兵士さへも、殖民地や北方の化外人を使用するに到り、遂ひに國は亡びた。古き羅馬ばかりではない。今日の英國が正しく其の通りである。農業衰へて英國衰へ、農業亡びて英

IMT 542

國亡ぶ。

×　　×　　×

我等は農本主義を忘れてはならぬ。特に教育の上に於て最も然りとする。先づ土に親しめよ。而して後、土の中より兵は出で來る。商工業者も出で來る。又た藝術家も、學者も、宗教家も出で來る。（昭和十七年六月四日）

占領地域の和平工作

我等は我が皇軍の連續せる大快捷、大奇捷の爲めに、我が占領地域の和平工作を閑却す可きものではない。否な有利なる戰捷と共に、其の效果をより有利ならしむ可きは、我等の尤も努力す可き責務だ。

×　　×　　×

和平工作には、自から兩樣の手法がある。一は當座的であり、他は恒久的である。一は糊塗的であり、他は根本的である。一は微溫的であり、他は徹底的である。

IMT 542

×　　×　　×

我等の主張は固より前者にあらずして、後者である。從來の經驗によれば、鬼角和平工作者は只だ當座の面倒を糊塗し、それを爲すには、何事も生ま溫るく、不徹底に、所謂る臭い物に蓋をして、一時を瞞過じさへすれば、跡は野となれ、山となれと云ふが如き傾向が多い。誤解する勿れ、我等は決して現在の和平工作者が、此の如しと云ふではない。但だ過去の歷史に徵し、之を現在及び今後に繰り返すなからん爲めに、斯く注意するまでだ。

×　　×　　×

固より火事場の跡仕末には、小堀遠州や、夢窓國師などの絕妙なる造庭師も無用だ。けれども火事場の跡仕末でも、徹底的と不徹底とがある。我等はその徹底的を望む。不徹底の跡仕末では一折角鎭火しても、その餘燼が再燃する虞がある。

×　　×　　×

我が占領地域を通算すれば、人口は九千萬、而して華僑の數は、七百萬より八百萬の間に在りと云ふ。彼等は總てとは云はぬが、從來その中の或者は、實に蔣介石の金庫であり、蔣介石の爲

IMT 542

めに抗日戰爭の御用を勤めたる者も亦た少くなかつた。今更ら彼等の舊惡を、逐一暴き立て、之を吟味するなどは、必要なき迄も、彼等が萬一今後に於て、鵜心を包藏し、我が治安を妨害するに於ては、一大鐵槌を下す可きは、當然の事である。否な豫じめ之を未然に防ぐの工作も尤も必要だ。

×　　×　　×

信賞必罰は、政治の要諦だ。寛猛兼濟、恩威並施は、人心を統御する大道だ。華僑ばかりではない。土著の住民は、概ねアングロ・サクソン人を心から優越人として崇拜してゐた。我等は我が軍政の當局者が、占領地に於て、必らず此の要諦と大道とに於て、遺漏なきを信ぜんと欲する者だ。されど念には念を入るゝの必要がある。我等は近比頻發の我が陸海大捷の快報に接し、感激の餘、敢て斯言を作す。若し之が無用の辯たらば、決して予一人の大幸には止らない。（昭和十七年六月十一日於大森山王草堂）

印度の獨立には實力を要す

IMT 542

六月十五日より泰國盤谷に於て、大東亞各地に散在する印度の諸有志は、愈々印度獨立の旗揚の手始めとして、其の會議が開かれるといふ。洵に祝著の至である。

× × ×

元來三億五千萬の印度人が、十萬にも足りない英人の爲めに支配せられ、英人の搾取機關として存在することは、不合理千萬の極である。然も今日が今日まで、事實としてその通りに存在してゐるは抑々何故ぞ。それは第一英人が、印度の各宗派、各階級を離間し、互に反目せしめ、所謂る分離せしめて支配すると云ふ、奥の手を逞しくするからだ。合すれば强を成す。何よりも先づ三億五千萬の印度人が手を携へて英人の羈絆を離れて獨立することだ。我等は今日印度に於ける會議派の首領ネール氏が、聖雄ガンヂー氏の、英人の印度より悉皆撤退と、英國の爲めに御用兵募集に反對する、この二箇條に無條件贊成の意を表明したるを見て、洵に快心の事である。

× × ×

英人の空手形は一再ではない。第一回世界大戰爭に際して英人は、戰爭後には屹度印度に、獨立同樣の自治を與ふるといふ約束にて、印度百萬の兵を出し、十萬の犧牲者を拂はしめた。然る

IMT 542

に事一度了れば、英人は恰も前言を打忘れた如くに放擲し去つた。即ち今回も又た同樣の手段にて、英人は凡有る甘言を以て、印度兵を徵發し、印度兵を以て、將に沈まんとする英國の運命を支持せんと企てた。先にはクリツプス來り、今回又たグロスター公來つた。佛の顏も三度とは此事だ。ガンヂー、ネールの諸君が、斷々乎として此れに反對したるは、寔に尤も千萬の事だ。

× × ×

但だ此際一言を要するは、單に消極的の反對や、言葉だけの決議では、迚も圖々しき英人を退去せしむることは出來ない。即ち英人が去れば宜し、去らねば、實力を以て彼を退去せしめねばならぬ。印度の獨立は、言葉だけでは出來ない。實力が必要だ。實力は即ち、極言すれば兵力だ。

× × ×

更らに一言を要するは、對日本の事である。我が皇國が、印度の志士に同情を表し、その獨立に對して力を藉す事を惜しまざることは、既に東條首相が繰返し宣言したる所だ。然るに印度人の中には、今尙ほアングロ・サクソンの、離間中傷を眞に受け、日本が印度に對して野心ありな

IMT 542

どと疑ひ、日本と協力することを憚かる者がある。これが所謂るアングロ・サクソンの秘術に乗せられたる者で、苟くもこの秘術に乗せられて居る間は、迚も印度の獨立の目的を完遂する事は出來ない。我が日本は印度に對して、何等の野心も無い。たゞ速かに、一日も速かに獨立國として、東亞共榮圏内にその仲間の一員として、活動せんことを祈つて止まない。（昭和十七年六月十五日於山王草堂）

百年戰爭

戰爭は何時まで繼續する乎と、屢々訊ふ人がある。予は毎度先づ今後一百年と見當を附くれば大なる間違ひあるまいと答へた。これは決して空言ではない。出鱈目でない。全く根據ありての返答だ。予は正しく斯く信じてゐる。それには確乎たる理由がある。

× × ×

一度大東亞の天地から、アングロ・サクソンを追ひ拂ひたりとて、それで一切萬事解決がつくと觀念するは、實に大なる心得違ひだ。近くは歐洲近世史に於ける、獨佛兩國葛藤の楔子たるア

IMT 542

ルサス、ロートリンゲン二州の問題の如きも、遠くはルイ十四世時代より、近くは一八七〇—七一年の獨佛戰爭に遡らねばならぬ。即ち此の問題の延長は、第十七世紀の後期より、第二十世紀の初期に及んでゐる。三十年戰爭、百年戰爭は、歐洲史には珍らしくない。乃ち十字軍の如きも斷續恒無かりしと雖も、中世紀史より近世紀史に於ける一大橋梁をなしてゐる。

× × ×

他を攻擊して、其の反擊なきに安心するは、餘りに自分勝手の事だ。されば今回の戰爭は、縱令一旦砲火を息むるの機會あるも、何日何時再發するか計り知る可からずだ。我等は今日からその覺悟、その決心、その準備が肝要だ。

× × ×

それには（第一）皇軍の占略したる土地の人民をして、我が皇國に隨喜、信服せしむるを要す。（第二）敵が如何なる兵力若しくは如何なる巧妙なる手段、方法を以てするも、決して彼等をして其の勢力を恢復せしむるの機會なからしむるを要す。詮ずるところ德を以て懷け、力を以て守る。この以外には、妙策もなければ、奇計もなし。

IMT 542

×　　×　　×

我等は遺産として子孫にまで此の大戰爭を殘すを心外千萬とする。然も國運發展の爲めには、我等の子孫も、我等の祖先、及び我等と共に、與に齊しく其の責に任ずるが當然の順序である。借金を殘すではない。大事業を殘すのだ。

×　　×　　×

何は兎もあれ大東亞戰爭は、極めて永續性のものだ。その一段階の完遂は、必らずしも遼遠ならざるも、歷史的意義に於ける完遂には、少くとも百年を期せねばならぬ。前進又前進、確保又確保。我等は此に於ていよいよ屯田持久の長策たるを知る。（昭和十七年六月一日）

關東軍に感謝す

六月二十七日の夜、關東軍報道部長福山大佐の放送は、我等一億國民が、感謝と感激を以て聽取したる所。而して其の最後に、本年正月二日の放送に、關東軍司令官梅津大將が、『北邊の護りは絶對に安全である。人々は安心して興亞の聖業達成に邁進され度い』との一句を繰返したる言

IMT 542

葉は、一億國民の心に金鐵の如き響きを與へた。

×　　×　　×

昭和十六年十二月八日、英米に對する宣戰の聖詔渙發以來、我が皇軍の活動は、實に千古の歷史に比類なき大戰果を奏し、敵味方に論無く、世界二十餘億の人類の心魂を驚殺せしめた。然も我等は此の偉大なる戰果の裏面に、我が關東軍の存在する事を忘却してはならない。云ひ換ふれば、關東軍が我が北邊の護りを鐵壁の如く堅くし、水も漏れず、蟻も這はない程嚴重なる防備が整齊して居ればこそ、南方の大活躍も此の如く出來たのである。世の中には表もあれば裏もある日向もあれば日陰もある。南方の陸海空軍の華々しき手柄は今更ら云ふ迄もない。然も蘇滿國境に、凍天漠地、氷雪を嚙み、默々として抑へ難き勇躍の兵氣を抑へ、兀々として方さに爆發せんとする敵愾心を壓搾し、動かざること山の如く、靜かなること林の如き、我が關東軍の忍苦、克己は、實に我が日本男兒にして始めて之を能くす可きものである。

×　　×　　×

凡そ軍人の本分は　大元帥陛下の統帥の下に在つて、其の銘々に分附せられたる最尊職責を敎

IMT 542

すに在り。攻むる必らずしも難きに非ず。守る必らずしも易きに非ず。否な舞臺の華やかなる活動に較ぶれば、奈落の底にて人知れぬ苦勞をなす事は、如何ばかり齒痒くもあり、口惜しくもあり、殘念でもある。然しながらそれを耐らへ、それに堪へ、それを忍ぶ所に始めて我が皇軍の眞面目がある。而して我が關東軍は實に此の眞面目を嚴守しつゝある。

× × ×

斯く言へばとて、我等は決して南進陸海空軍諸勇士の功勞を、彼此れ比量せんとするではない。彼等の功勞は我等十二分に之を認識し、感謝崇仰尚ほ足らざらんことを惧る。但だこれと同一時に、奈落の底に於ける偉大なる功勞者のあることを、我が一億國民は張目明目して、是を感謝するの必要を感ずるのみである。關東軍の前途尚ほ遼遠、時が變れば舞臺も變る。冀くは自愛自重して、壯士慘として驕らざるの氣分を堅持せよ。（昭和十七年六月二十八日、疾を力めて）

IMT 542

東亞の光

IMT 542

（編者註）　本講演は昭和十七年六月十三日、改裝成つた青山會館に於いて、時局大講演が催された際、青山會館の創立者である蓑峰翁が、自ら進んで演壇に立つて爲したるもの。時に翁は甚しき眼疾と、その誘發に依る顔面神經痛に惱みながら、然も時局に鑑みる所あり、病を押して皇國日本が東亞の光となるに就いて爲さればならぬことを語つたものである。講演の終つた夜より、翁は遂に病床の人たる可く餘儀なくせられ、約五十日呻吟苦惱した。翁の報國の至誠は、倒れる迄も其の所信を國民に訴へずにはをられなかつたものとして、本講演は特に感銘す可きものと思ふ。

IMT 542

東亞の光

◇怪雲妖霧を排除

『東亞の光』といふ題でお話を申上げますが、日本は元來光の國であります。現に天照大神樣は、昔から私共は太陽に象つてゐるがみ奉つてをるのであります。藤田東湖先生の『明德太陽に倂し』といふ句があります通り、その　天照大神樣の御子孫であらせられるところの　我が皇室は、即ち聖德太子のお書きになつた『日出づるところの天子樣』でおいでになります。日出づるところは、即ち光の發するところである。それで日本は光の國である。光が即ち日本の國體であります。國の宗であり、國の命であり、國の魂であり、併せて國の姿でもあります。

IMT 542

然るに、この光をアングロ・サクソンの怪雲妖霧が、太陽をすつかり四方から覆ひかくして、その光の放射を妨げてをりました。それで、今回の大東亞戰爭は、その怪雲妖霧を一掃するところの戰爭であります。即ち東亞の光であり、同時に世界の光であるところの日本の光を、アングロ・サクソンの怪雲妖霧によつてさへぎり、覆うてゐるところのものを、一切拂拭してしまはなければなりませぬ。即ち拂拭するところのこれが大東亞戰爭の今日であります。然るに、この戰爭が始まりまして以來、既に空陸海三方面に於いて、彼等を東亞の方面より驅逐して、殆んど既に半ば以上に達しました。併しながら、昔の人の申しました通りに、百里の道は九十里をもつて半ばすといふ通りであつて、これから我々の大いなる決心、大いなる覺悟が必要であると、私は信ずるものであります。

實は昨年の十二月八日以來、餘りに素晴らしき好結果のために、餘り連戰連勝のために、却つてこの戰爭の重大性といふものを閑却する虞れはないかと、私は思

IMT 542

うてをります。元來申すまでもないことでありますが、この戰爭は振古未曾有の戰爭である。二十七八年の戰役や、三十七八年の戰役などといふものは、今回の戰爭に較べると、その規模は遙かに小さいといはねばなりませぬ。日本がイギリス一國を敵としても、アメリカ一國を敵としても、どの一國を敵としても、なか〳〵これは重大なる敵である。然るに、その兩國を敵とするといふことになつては、容易ならぬ大冒險ですらあります。それ程の冒險をなしつゝ、我々が戰ふ毎に勝ち、攻むる毎に取る、かういふわけでありますから、却つてその大冒險であるといふことを、忘れてゐるやうなことはありはしないかと虞れるのであります。

◇常勝を誇つた英國

今更、私が申すまでもなく、アングロ・サクソンといふものは、世界優秀の民族として自ら誇つてゐる者であります。彼の英雄ビスマルクですらも、イギリスに向

IMT 542

つては小指をもさすことが出來なかつた。英國の歴史は皆樣は御承知でもございませうが、少くともエリザベス女王以來昨年十二月八日までは、勝利の歴史でありました。征服の歴史でありました。エリザベス時代にはスペインのアルマーダ、無敵海軍を打破して、スペインの海軍を粉碎した。また大陸に於いては、今日の英國の首相ウインストン・チャーチルの先祖、第一世のマルボローが、ブレンハイムに於いてフランス人を壓しにした。トラファルガーに於けるネルソン、ワーテルローに於けるウエリントン、下つて大正年代、世界第一次の戰爭に至るまで、英國はたまには負けることもあるが、それは勝敗は兵家の常であつて、終局には必らず勝つたものであります。それが英國の歴史であります。

◇歴史に無き英國の敗北

しかも英國は初めはスペインと戰ひ、次にはオランダに勝つたし、フランスと戰

ひ、やがては赤兒の手をねぢる如く、オランダの手をねぢり、而して、最後に歐洲列國力を連ねて、ドイツを遂に包圍の陣に陷らしめました。更にその手をもつてABCDのいはゆる包圍陣をもつて、今回日本を苦しめて來たのでありますが、三百年傳統的にやつて來たところの勝利を、我が日本の海陸空の三軍によつて覆されて、世界歴史あつてより以來、未だ曾て見ざるところの英國、および英國の親類の米國、この兩國の敗北を見るに至つたのであります。

此の如きことは歴史の上に未だ曾てないことであります。歴史のどこの頁を見てもかういふことはない。今度初めてかういふ事件が起つたのである。英國はヨーロッパばかりではない、東洋に於きましても、ゴルドン將軍が長髮賊に對して戰つた時には、エヴァー・ヴィクトリアス・アーミー卽ち常勝軍といふ名が附いてゐました。常に勝つ軍、さういふ英國でありました。東亞に於ける英國は、鶏群の一鶴といふ位のものではない。富に於いても、文化に於いても、兵力に於いても、英國は

一つの力を以つてアジアの總てを壓するに餘りあると思はれてゐました。況んや、それに加ふるに更に英國の新店、分家、新しき血液の流れてゐる天下第一の裕福者であるところの米國と、互に手を携へて來るに於いてをやであります。

◇世界の二大横綱相手の勝負

此の如く世界の大横綱二人を對手にして、まあ日本はどの位の程度であるかといへば、田舍大關位である。即ち支那は叩かれるのは當り前である。昔から支那が勝つたといふことは歴史にないことであります。支那五千年の歴史は皆な敗北の歴史であります。日本が支那に勝つたといつても、五千年來の事實の眇たる一つのことに過ぎませぬ。またロシヤに勝つたといふけれども、日本人は本當にロシヤと戰さをしたのではない。アジアの出先きで戰さをした。本當にロシヤと戰さをするといふならば、モスコー若くはペテルブルグ、少くもオデッサ、キエフ、その邊まで出

IMT 542

掛けて戰爭しなければならぬ。遼陽やら、奉天やら、旅順あたりは、勝つたといつてもそれは田舍の話である。それで、日本は大關だけれども、先づ田舍相撲、宮相撲の大關位である。その日本が今度富に於いても、凡有る物資に於いても、歴史の上に於いても、世界最强の强大國二つを對手として戰さをするといふことであるからして、これまでの戰さとは比較になりませぬ。眞に國家の隆替を決する重大問題であります。

◇英米依存論者と予の反對

それで、私は昨年十二月八日以前に、我が皇國日本に於いて、一部に英米依存論者のあつたことを、決して怪しみませんが、私共はさういふ論者に反對して、戰はねばならぬ。戰へばきつと勝つといふことを申したのは、これは彼等にとつてはとても常識の許さないことでありました。

IMT 542

私などはさういふ論を吐いたために、まさか刑務所まで連れて行かれるといふ心配はなかつたかも知れませんけれどもが、現に私共の親しい者のうちでも、どうも德富老人などは困る。なんか氣が違つてゐるんぢやないか。少しどうも變だ。せめて一度アメリカまで連れて行つて、アメリカ富强第一のことを見せしめたならば、前非を改悟するに相違ない。どうも人間もあれまで古くなつては、匙加減では當らないといつて、匙を投げた人もある。またもうこれ以上は牢屋にぶち込むまでもないが、せめてここの御近邊の齋藤茂吉先生の病院、もしくは松澤病院へ入れる方が、國家のためにも御當人のためにも仕合せではあるまいかといふやうな譯であつた。

私はそれに對して決して不平をいふのではない。それが御尤もなことだ、當り前のことだ。さういふ人々は、イギリス人が何時も勝つと思つてゐる。アメリカ人が何時も勝つと思つてゐる。イギリス人、アメリカ人の眼を通して、自分の國を見る人達であるから、さう思ふのが當り前であります。しかし、私は決して先程眼が惡

IMT 542

いと申しましたが、全くの盲目ではない。イギリスの强いことも知つてゐる。アメリカの强いことも知つてゐる。しかし同時に彼等の弱いこともよく知つてゐる。

イギリス人は日本と同盟した人種でありますけれども、これは全く日本を利用するために同盟をしたのであつて、一寸も日本人を知つてゐる人種ではない。日本人が分らない。支那人ならば分る。幾らか似てゐる。しかしながら、日本人のことはイギリス人には分らない。云うて聽かせても分らない。考へても分らない。その證據を擧げますと、日本に來て、日本のことを最も研究した人は、チエンバレンといふ人である。大學の先生をして、王堂といふ號を持つてゐた。日本ではチエンバレンに頼んで日本の文典を檢査して貰つたことがある。『古事記』の研究をして貰つたこともある。また『シングス・ジャパニース』とか澤山の本を書いた。日本の古典學者であり、同時に日本の學者であるが、彼は最も日本を知らない日本學者である。彼の『新宗教の製法』といふ本を讀めば、『日本には忠孝といふことは昔は無か

IMT 542

つた。維新以來、維新改革の先達者が日本の將來の爲に忠君愛國といふ新宗教を拵へた』云々とある。維新改革は日本の傳統的の忠君愛國の精神に依つて出來たので、維新に依つて忠君愛國が新しく出來たのではない。彼はまるで原因と結果を取り違へてゐるのである。これで日本學者である。バークスの如きは、日本の前途を當時の南米共和國に比してゐる程である。

それで、かつて日本の或る外交官が林伯に向つて『日英同盟でイギリスの日本を待遇する態度も餘程よくなつたでございませう、どうです』と訊いたら、林伯は無雜作に答へていはれるのに『さあ、日本はまあセルビヤの次位ですかね』セルビヤはどこか御承知でありませう。まさかセルビヤを御承知にならないお方はないと思ひますが、これはバルカンの一小國である。そのセルビヤの次に、日本は日英同盟をしたために漸く持ち上げられて來たのである。

それぐらゐの態度で日本を見て來たものであるからして、日英同盟などと云つて

IMT 542

も、ただアジアを日本人に番をして貰ふために、同盟をしたのであつて、決して肝膽相照すなどといふことは露ほどもあつたものぢやない。それを日本の方で大變難有く思つてゐたのは、日本人の大間違ひである。先程大場少將のお話にも、日本人はとかく自分の考へで向ふを見て、まあ一と口にいへば人が好過ぎる、かういはれたやうでありますが、まことにその通りである。實にお芽出度い國民である。

それで、日英同盟の用が濟んだ後では英國は、もう日本を眼の仇として、ただ日本を叩きさへすればいい、かういふ風に考へて來た。それで、英國が如何に叩いても日本が起つ心配はない。併しながら、日本といふ奴は少し氣狂ひ染みたところがあるからして、餘りに露骨にやると、噛みつくかも知れぬ。それで眞綿で首を締めるやうにそつと締めてさへ行けば、どうせこれは參るものといふことが、イギリス式の考へ方である。さういふ狀態でずつとこの五年間は續いて來た。更に溯つて滿洲事變以來と申してよろしい。そのイギリスであるから、肝膽を披いて相談して行

IMT 542

かうといつても相手にならない。向ふをやつつけるか、向ふのいふ通りにするか、三つより外はない。妥協の道がないといふのが私の考へである。

◇正を以つて合し奇を以つて勝つ

それで、私はとてもイギリスのいふことを肯いてゐては、日本は存在の値打ちがない。一つやつつけるがいい、やつつけるにはやつつける道がある。『孫子』を讀めば書いてある。『孫子』には『正を以つて合し、奇を以つて勝つ』といふことがある。英國と日本では勢力を大體分ければ、五分五分のところである。これが『正を以つて合し』である。『奇を以つて勝つ』といふことは、それは日本男兒の精神を以つて、彼等をやりまくることである。桶狹間の戰さはなんであるか。毛利元就の嚴島の戰さはなんであるか。秀吉の山崎合戰、賤ヶ嶽はなんであるか。總てこれは正を以つて合し、奇を以つてを勝つてをる。即ち日本海の海戰の如きは、最も奇を以

IMT 542

つて勝つた著名なる一であります。それで日本は奇を以つて勝つだけの準備は日本精神といふものを持つてゐる。日本の訓練といふものを持つてゐる。日本の三千年來の傳統的の歴史を持つてをります。

◇デモクラシーの腐敗

それなら向ふはどうであるか。向ふは腐つたデモクラシーといふものを持つてゐる。デモクラシーも腐らないうちは幾らか物になる。しかしながら、腐つたデモクラシーは、まるで魚の臓腑の腐つたやうなもので、とても眞持ちがなりませぬ。英國のデモクラシーといふものは、御承知の通り十九世紀の半ばまでは、幾らかまあ腐らずにゐた。十九世紀の過半から二十世紀の初めになつて、もう英國のデモクラシーといふものは極端に腐つてゐる。病が骨髄に入つてゐる。

それは即ちロイド・ジョージ、第一次世界戰爭の時の總理大臣であつたロイド・

IMT 542

ジョージの書いたものを御覧になれば分ります。當時イギリスは敵と戦ふよりも、勞働者は政治家と戦ひ、敵の足下を見るよりも、自分の政府の足下を見た。政府さへゆすり、勞働賃銀さへ増せば、國が滅びても、戦さに負けても構はんやうな條件の下にやつてゐる時に、その國が戦さをして勝つ筈はないのであります。負けるのが當然のことである。もう戦はずして負けるべきものを作り出してをつたのであります。それで、彼等は戦さといふことはとても出來ないといふことを知つて、ただ恫喝、すなはちおどし文句でやつつけるといふことだけを考へて行つた。孫子が所謂る『虞を以て不虞を待つ者は勝つ』といつたのはその理である。

それで、今日日本は今申したやうに、赫々たる勝利を得てをります。今日我が皇軍は我が東亞の恩人ばかりでなく、かねて英米打倒を主張したる我々に取つても實にどうも非常なる恩人である。私共はとても今日の陸海軍の皆さんに向つては、足を向けて寝ることが出來ないといふ氣持がしてゐる。萬一のことがあつたら國も迷

IMT 542

迷だが、主戦論を主張した我々も、まさか引出して首は斬られないでも、自分が切腹しなければならんやうな立場になつて來る。それを救うて頂いたのは我が皇軍のお蔭であつて、我々は實にその點に於いて、感謝已むあたはざる次第であります。此の如くにして我が三千年來の陽光が、一時に雲を破り、霧を拂うて東亞の天地に輝いて來たわけであります。

◇米英精神の徹底的排撃

それで、さてこれから東亞の光を發するには、今申した通りアングロ・サクソンの妖雲怪霧を一掃する必要がありますが、これを一掃するといふことはさう樂なことではない。戦さして勝つたから一掃したといふわけにいかない。アメリカの軍艦が一隻もなく、イギリスの兵隊が一人もをらんから、英米の勢力を東亞から一掃したといふわけには行きません。彼等は三百年來、特にイギリスは十七世紀以來、東

IMT 542

洋に勢力を扶植して來たものであります。彼等が三百年來植ゑつけて來たところの勢力を、三日や三個月で絶滅することは、これは決して容易には出來ませぬ。

王陽明が申した通り『山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し』である。我々は我が陸海軍の力によつて、英米を東洋より驅逐し去ることは出來たが、彼等が植ゑつけたところの精神を驅逐して去るといふことは、容易なることではない。これは一朝一夕のことではない。私共はこれには餘程の大決心、大覺悟をせねばならないと思ひます。交讓妥協といふことは、必らずしも惡いことではありません。併し今日私共の求めねばならぬことは、英米兩國に對する交讓妥協といふ精神を、徹底的に驅逐せねばならぬことであります。もう大概これでよからうといふやうなことはいけない。大概ではいけない。絶對にやつつけねばならぬ。どこまでもやつつけなければならぬ。一本の草でも拔いてやつつけるといふ決心をしない以上は、彼等の勢力がやがてまた胚胎して來るといふことは、私がここに豫言して憚らない

IMT 542

ところであります。

◇英語及び英語文化の驅逐

それ故に、我々はどこまでもこれからはやらなければなりませぬ。それをやる第一は占領地に於けるところの英語——言葉は大切なものだと思ひますが、——に代へるに我が日本語をもつてしなければなりませぬ。華僑は固よりマレー人、フイリツピン人、凡有るインドネシヤ人、さういふ人々が英語が一番便利であるといふことのために、總てのことをただ英語をもつてやるといふことになつたならば、やがては英語が導火線となつて、英國人が必要となり、米國人が必要となり、學生も皆なロンドンに行くか、ワシントンに行くか、ニューヨークに行くといふことになるのである。それで、イギリスの海峽植民地に於けるばかりでなく、凡有る我が皇軍の統治地、即ち占領したるところの地域からは、賊徒を一掃すると同じ意味に於い

IMT 542

て、英語を一掃するといふことをどうしてもしなければなりませぬ。

英語に餘り寛大なる處置を施して、當局や官吏が、法律を出すのにも、告示をするのにも、英語でやるといふことになつたらば、『日本人もやはりイギリス人の御家來かな』かういふことになつてしまひます。故に私はどうしてもここに英語を驅逐するといふことをしなければならぬと思ふ。彼を知り己れを知るためには、我々は英語を讀む必要がある。併しながら一切公用の言葉としては、我が皇軍の占領したるところの地域からは英語を驅逐しなければいけない。かう信ずるのであります。

それでまた英語文化の代りに、日本文化をもつてしなければなりませぬ。總てフイリッピンにせよ、海峽植民地にせよ、凡有るところの制度といふものは、皆なアングロ・サクソンのモデルでやつて來てをります。會議の組織、若くは行政の形體といふことは、皆なアングロ・サクソン流にやつてをる。それをすつかり取り除けて、日本流に根本的にやり直さなければいけないと思ひます。

IMT 542

それで私は誰がいいとか、誰が惡いかといふことはここではいはないが、軍政を支配する人は、ただ戰ひの上に於いて敵に勝つばかりではなく、政治の上に於いても敵性國家を撲滅して、我が皇國の光を發揮するところの人でなければならんといふことを、私は特にこの場で强調して置きたいと思ふのであります。

◇遠心力と求心力との發揮

ヨーロッパのことは、これはヨーロッパの方を引受けてゐるドイツ、イタリアの人々にやつて貰ふのであるから、我々はしばらくヨーロッパのことは、我が同盟國に委せて置かなければなりませんが、東亞のことは我が皇國が自らこれに任ずべきことは當然のことであります。これに任じて行くためには、我々はここに大いなる覺悟をしなければなりませぬ。

すなはち一つは遠心力、一つは求心力、この二つの力をもつて我々は進んで行か

IMT 542

なければならない。遠心力といふのは、我が皇道を到るところに發揮して、恰も潮がさして行くやうに、どしどし進んで行くことである。求心力といふのは、我が日本を中心として凡有る民族、凡有るものを日本に引き寄せることである。この二つのことが大切であります。

特にこの引き寄せるところの力といふものは、最もこの際大切である。日本の祝詞の中には御承知の通り『狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打挂けて引き寄する』とあります。即ち狹い國は廣くなり、坂のある國は平坦になり、遠い國は八十綱かけて引き寄せるやうにしなければならぬといふやうに、我が日本を中心として、總てのものが日本に集まらなければならぬ。即ち日本は東亞の中心となるといふことを第一に考へなければならぬ。東亞の中心になるといふことは、東亞の光となることである。しかし東亞の中心となるといふことは、さう樂には行きませぬ。

IMT 542

誰でも必要のないところには來ないのである。水は低きに流れるといふことがありますが、誰も必要のないところには來ないのである。それで總ての人が日本に來なければならない。嫌やでも應でも日本に行かなければならないといふやうな日本の國にならなければいかぬ。それには日本が先づ東亞の模範國にならなければいけない。店になんにも賣るものがなくして、如何に大きな聲で喚鳴つて、買ひに來いといつても、賣るもののないところには誰も來るものはない。苟しくも豆腐一丁でも賣らうとすれば、今日は十人、二十人がその前に立つて待つてゐる。無い店にはお客は來ない。それで日本が東亞の中心とならなければならないが、東亞の中心となるだけの模範國に日本がならねばならぬのであります。

◇東亞の中心としての日本

即ち學問をするにも日本に來る。研究をするにも日本に來る。商賣をするにも日

IMT 542

本に來る。取引をするにも日本に來る。樂しみにも日本に來る。病人も日本に來る。かういふ風にしなければなりませぬ。日本にアジアの民族が來り學ぶ所の學校、アジアの民族が來つて研究する所の研究所、アジアの民族が來り觀る所の博物館、アジアの民族が來つて樂しむ所の大いなる公園、また大いなる病院、凡有る美術館、凡有る寺院、さういふものを悉く日本に建てて、總て東亞各民族の子弟は、皆日本に來り學ぶ。かういふ風でなければいけませぬ。

しかも日本人が彼等を待遇することが親切丁寧、所謂る日本固有の厚く遠くを見るところの情味を發揮するに於いては、初めて日本が東亞の中心になることが出來るのであります。唯だ敵を叩きさへすれば、東亞の中心になるといふことではない。敵を追つ拂ふといふことと、味方を寄せつけるといふことは別問題である。敵さへ追ひ散らせば、あとは勝手に寄つて來るといふけれども、愚圖愚圖してゐると追ひ散らしても、北米の方に逃げて行くかも知れない。それで餘程私共は考へなければ

IMT 542

いけないと思ひます。さうして私共は所謂る歐洲流の權利一點張りの主義、アングロ・サクソンの自己中心主義、個人主義、物質主義、優勝劣敗主義、卽ちイギリスの學者マシュー・アーノルドが『中流社會は物質的になり、勞働社會は禽獸的になる』と云つたやうに、物質主義から禽獸主義、さういふものを悉く擊破してしまつて、我が皇道の人類相愛、一生々不息、結ぶところのちぎり、生きるところの力、殖やすところの機運、凡有る正義、倫理を以つて、我が東亞の天を掩はなければなりませぬ。これがすなはち東亞の光であり、やがてはそれが世界の光となるものであります。

「◇英米人の欺瞞」

「元來英米の仁義などといふものは、全く欺瞞の仁義である。欺しの仁義である。一方に阿片を賣つて、他方に宣教師をやつてをる。それで英國の學者スペンサーの

IMT 542

如きは、『どうも英國から東洋に宣教師をやるなんていふことは間違ひである。本當をいへば東洋から英國に宣教師をやつて貰ひたいものである』かういつてをる位である。イギリス人が自分からどうも困つた國であるといつて愛想をつかしてゐるくらゐである。さういふ御連中である。曾つて阿片問題が英國議會で反對討議をされた時、バーマーストンが『キリスト教では汝の右の頰を打たば、左の頰を向けよといふことがある。しかし我々はその向けた頰をまた殴つてなんの差支へがあるか』と云ひました。左の頰を打つて右の頰を向けたら、また右の頰を打つ、かういふわけで一向差支へないではないか。かういふことをいつてをるのであります。

それでありますから、宣教師さへやつて置けば、阿片を賣らうが、毒を賣らうが差支へないではないか。まるで隣りにお醫者さんをつけて置けば、毒を飲まさうが藥を飲まさうが差支へないではないかといふ譯で、實にどうも困つた先生である。さういふ先生等と我々は一緒に歩けない。歩けないばかりではない、さういふ先生

IMT 542

は叩き潰してしまはなければなりませぬ。潰來得ることならば、地球の涯まで追ひ出したいけれども、それほど手が屆かないから、せめてアジアからなりと彼等を追ひ出してしまはなければなりませぬ。

◇皇室中心の精神を養へ

私のお話は大部分これで盡きてゐる。ただここに一言申して置きたいことは、我我は此の如く戰さに勝つたといふことは、アングロ・サクソン退治の第一幕であつて、これから第二幕、第三幕といふものが續いてをります。我々はこれからが骨なのである。そこで今少しく我々は深味を持つて貰ひたい。今少しく深味を持つてをつて、今少しく皇道普及の精神を持つてをり、さうして我々常住不斷　皇室中心の心を持つて、如何なる場合にでも、いざとなれば我が君國のために、我々の總てのものを捧げるといふ決心を常に持つてゐて貰ひたい。かう思ふのであります。

IMT 542